栃木県埋蔵文化財調査報告第381集

雀宮宿跡

―街路づくり事業費（補助）３・４・109号雀宮駅前線（一般県道雀宮停車場線）
に伴う埋蔵文化財発掘調査―

2016.3

栃木県教育委員会
公益財団法人とちぎ未来づくり財団

すずめのみや　しゅく　あと

雀宮宿跡

―街路づくり事業費（補助）３・４・109 号雀宮駅前線（一般県道雀宮停車場線）
に伴う埋蔵文化財発掘調査―

2016.3

栃木県教育委員会
公益財団法人とちぎ未来づくり財団

序

雀宮宿跡は、栃木県のほぼ中央、宇都宮市南部の雀宮地区にあります。

江戸時代の五街道のひとつ日光道中は、江戸と日光を結ぶ全長36里（約144km）の街道で、将軍家の日光社参、あるいは、奥州諸大名の参勤交代に重要な役割を果たしました。雀宮宿は日光道中の起点日本橋から数えて16番目の宿場で、天保14年（1843）調査に基づく幕府編纂の『宿村大概帳』によれば、街並みの長さ約581m、本陣、脇本陣、問屋などの公用施設、旅籠などの宿泊施設を備えていたことなどが記されています。

この度、栃木県県土整備部による一般県道雀宮停車場線拡幅事業に伴い、路線内に所在する遺跡の取り扱いについて関係機関と協議した結果、記録保存を目的とした発掘調査を実施することといたしました。

本報告書は、雀宮宿跡発掘調査の成果をまとめたものです。今回は、仮本陣跡とされる敷地の一部を調査し、雀宮宿跡の内容を解明する上でたいへん貴重な成果を得ることができました。本書が県民の皆様にとって郷土の歴史を理解する一助となるとともに、各方面において広く御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまで、多大なる御協力をいただきました栃木県県土整備部、宇都宮市教育委員会をはじめとする関係機関、並びに関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成２８年３月

栃木県教育委員会

教育長　古　澤　利　通

例　言

1．本書は、栃木県宇都宮市雀宮１丁目、３丁目地内に所在する雀宮宿跡の報告書である。
2．発掘調査は、栃木県県土整備部による街路づくり事業費（補助）３・４・109 号雀宮駅前線（一般県道雀宮停車場線）に伴うものである。
3．発掘調査は平成 26 年度の 10 月～ 11 月に実施し、栃木県教育委員会事務局文化財課の指導により公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターが調査を実施したものである。
4．発掘調査から整理作業・報告書作成までの担当者は以下のとおりである。
【発掘調査】平成 26 年 10 月 1 日～平成 26 年 11 月 30 日
副所長　　初山孝行
調査課　嘱託調査員　大木丈夫
【整理作業】平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 30 日
副所長兼整理課課長　藤田典夫
調査課　嘱託調査員　大木丈夫
5．遺構・遺物の写真撮影は担当者が行った。
6．本書は第１・5 章を藤田典夫が、第２章第２節、第３･4 章を大木丈夫が執筆した。なお、第２章第１節は、栃木県埋蔵文化財調査報告第 374 集のものを使用した。
7．表土除去は工事の進捗にあわせて渡辺建設が担当した。基準点測量・図化は株式会社ニッコー、航空写真撮影は中央航業株式会社に委託した。
8．発掘調査の実施並びに報告書の作成にあたっては、栃木県教育委員会文化財課の指導を受けた。
9．発掘調査協力者は次のとおりである。
磯崎恵子、高田延子、森田幸江（順不同・敬称略）
10．整理作業・報告書作業の参加者は次のとおりである。
長道子（敬称略）
11．雀宮宿名主芦谷孚家文書の閲覧に際しては栃木県立文書館の山本訓志氏に協力を得た。同家の写真の掲載については、同館の許可を得ている。また、記して感謝する。
12．本遺跡の調査概要については埋蔵文化財センター年報、栃木県埋蔵文化財保護行政年報等で報告されているが、本書をもって正式報告とする。
13．本遺跡に係わる出土遺物・実測図・写真等の資料は、公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターで保管している。

凡　例

1．県道拡幅工事に伴う雀宮宿跡の調査での遺跡の略号は UT-SZSP である。
2．発掘調査時の遺構は、土坑：SK、地下室及び不明遺構：SX、溝：SD の略号で表した。
3．遺構実測図の縮尺は 1/60、遺物実測図の縮尺は図版ごとに示す。
4．標高は、海抜標高である。
5．遺跡のグリッド配置図は、新世界測地形の座標に基づいている。

目　次

序
例言
凡例
目次
挿図目次・表目次・図版目次

第１章　調査の経緯
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査の方法と経過……2

第２章　遺跡の環境
　第１節　地理的環境……5
　第２節　歴史的環境……5

第３章　検出された遺構と遺物
　第１節　調査の概要……9
　第２節　検出された遺構と遺物……10
　（１）１区の遺構と遺物……10
　（２）２区の遺構と遺物……18
　（３）３区の遺構と遺物……26
　（４）４区の遺構と遺物……31
　（５）遺構外出土遺物……34

第４章　調査の成果
　第１節　古代から中世……43
　第２節　近世以降……44
　（１）県道拡幅工事に伴う調査について……44
　（２）平成 26 年度調査について……46

第５章　まとめ……55

挿図目次

第 1 図　雀宮宿跡位置図…… 1
第 2 図　遺跡の位置と地形図…… 1
第 3 図　雀宮宿跡全体図とグリッド配置図…… 3
第 4 図　県道雀宮宿跡調査区位置図…… 4
第 5 図　雀宮宿跡位置図及び周辺の遺跡…… 6
第 6 図　1a・1b 区遺構実測図……11
第 7 図　1a 区出土遺物……11
第 8 図　1b 区出土遺物……11
第 9 図　1c・d 区遺構実測図……13
第 10 図　1c 区出土遺物……14
第 11 図　1d 区 SK-6・SX-12 出土遺物……15
第 12 図　1d 区 SX-12 出土遺物……16
第 13 図　1d 区出土遺物……17
第 14 図　1e・f 区遺構実測図……19
第 15 図　2a 区遺構実測図……20
第 16 図　2a 区 SX-39 出土遺物 (1)……21
第 17 図　2a 区 SX-39 出土遺物 (2)……22
第 18 図　2a 区出土遺物 (1)……23
第 19 図　2a 区出土遺物 (2)……24
第 20 図　2b 区・排土内出土遺物……25
第 21 図　3a・b 区遺構実測図……27
第 22 図　3c・d 区遺構実測図……29
第 23 図　3e 区遺構実測図……30
第 24 図　4a 区遺構実測図……33
第 25 図　4a 区 SD-22・SD-46 出土遺物……33
第 26 図　4b 区遺構実測図……35
第 27 図　4b 区出土遺物……35
第 28 図　雀宮宿家並絵図（調査区位置入れたもの）……45
第 29 図　H 26 年度雀宮宿跡調査区位置図……47
第 30 図　雀宮宿宿割図……49
第 31 図　雀宮宿宿割図（名前入）……50
第 32 図　雀宮宿家並絵図……51・52

表目次

第 1 表　周辺の遺跡…… 7
第 2 表　1a 区出土遺物観察表……36
第 3 表　1b 区出土遺物観察表……36
第 4 表　1c 区出土遺物観察表……36
第 5 表　1d 区SK-6出土遺物観察表……36
第 6 表　1d 区SX-12出土遺物観察表……36～37
第 7 表　1d 区出土遺物観察表……38
第 8 表　2a 区SX-39出土遺物観察表(1)……38～40
第 9 表　2a 区SX-39出土遺物観察表(2)……40
第 10 表　2a 区出土遺物観察表(1)……40～41
第 11 表　2a 区出土遺物観察表(2)……42
第 12 表　2b 区出土遺物観察表……42
第 13 表　4a 区出土遺物観察表……42
第 14 表　4b 区出土遺物観察表……42
第 15 表　雀宮宿坪数毎家数表(天保13年)……44
第 16 表　調査区家主対照表……48

図版目次

図版一　航空写真　雀宮宿跡遠景（北から）　雀宮宿跡全景（南西から）
図版二　遺構一 1a 区　全景（北西から）
1a 区　SK-1　完掘（西から）
1a 区　SK-1・SK-3　完掘（南西から）
1a 区　SK-3　土層堆積状況（南から）
1c 区　全景（南東から）
1c 区　SK-6　完掘（北東から）
1d 区　全景（北西から）
1d 区　SX-12　完掘（西から）
図版三　遺構二 1d 区　SD-8,SK-9　完掘（西から）
1d 区　SX-12　土層堆積状況（北から）
1d 区　SX-12　遺物出土状況（東から）
1e 区　全景（東から）
1e 区　SD-5　完掘（西から）
1e 区　SD-5　土層堆積状況（東から）
1f 区　全景（西から）
1f 区　SD-13,SK-14・15・18 完掘（北から）
図版四　遺構三 1f 区　SD-13,SK-16・17　完掘（北から）
1f 区　SD-13,SK-19・20　完掘（南から）
1f 区　SD-13,SK-19　土層堆積状況（東から）
2a 区　全景（南東から）
2a 区　SX-39　西壁検出状況（南から）
3a 区　SD-21・22,SK-23・25-28 完掘（東から）
3a 区　SD-21　土層堆積状況（南から）
3b 区　全景（北西から）
図版五　遺構四 3c 区　全景（東から）
3c 区　SD-22 完掘（東から）
3d 区　全景（西から）
3e 区　SD-22,SK-30 完掘（北西から）
3e 区　SK-31　完掘（西から）
3e 区　SD-22　土層堆積状況（西から）
4a 区　全景（北から）
4a 区　SD-22　完掘（東から）
図版六　遺構五 4a 区　SK-40・41・42　完掘（北から）
4a 区　SK-43　完掘（北西から）
4a 区　SK-44　完掘（西から）
4a 区　SD-46・SK-47・48　完掘（北西から）
4a 区　SX-49　完掘（北から）
4b 区　全景（北から）
4b 区　SK-50　完掘（東から）
4b 区　SK-50　土層堆積状況（西から）
図版七　遺物一　（陶磁器）
図版八　遺物二　（陶磁器）
図版九　遺物三　（陶磁器）
図版十　遺物四　（陶磁器）
図版十一　遺物五　（陶磁器）
図版十二　遺物六　（陶磁器・内耳土器・瓦）
図版十三　遺物七　（陶磁器）
図版十四　遺物八　（陶磁器・土師器・須恵器・土製品）
図版十五　遺物九　（石製品・キセル・銭貨・鉄製品）・古文書

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

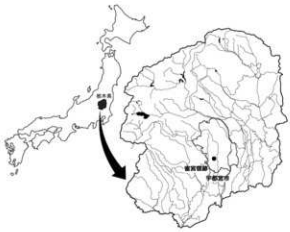
東日本旅客鉄道東北本線ＪＲ雀宮駅の周辺は、平成22年に策定された「第２次宇都宮市都市計画マスタープラン」において「駅を核とした地域交流拠点」に位置付けられ、都市機能の強化を図るためにさまざまな整備事業が国、県、市の連携のもと計画された。具体的には、駅機能の強化として駅前広場や東西自由通路及び橋上駅舎整備、文教施設整備として県立宇都宮工業高校の移転に伴う建設や市立南図書館の新設、駅周辺道路整備として国道４号拡幅、市道704号線および713号線拡幅等などとともに、都市計画道路３・４・109号雀宮駅前線（一般県道雀宮停車場線）の拡幅事業がある。

一般県道雀宮停車場線はＪＲ雀宮駅と国道４号を結ぶ全体延長およそ300m、雀宮地区の象徴となる道路である。沿道には商店や飲食店等が立ち並び、鉄道利用者（一日約6,600人）や買物客など多くの人々に利用されている。現在の道路は全幅７ｍと幅員が狭く、センターラインや歩道もないことから、特に朝夕の通勤通学時には、自転車や歩行者、自動車が交錯して大変危険な状況となっている。

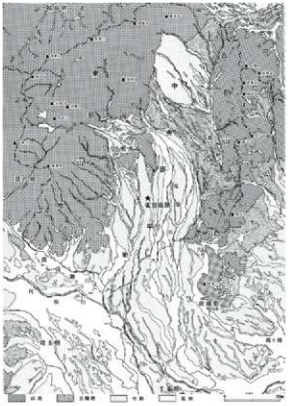
このため栃木県では、ＪＲ雀宮駅へのアクセス機能を強化し交通の円滑化を図るとともに、自転車と歩行者の通行空間を確保し、併せて電線を地中化して電柱や電線をなくすことで街並景観の向上、あるいは災害対策機能を向上させることを目的に、幅員19m（車道片側３ｍ、排水施設片側1.5m、自転車歩行者道片側５ｍ）の拡幅整備を行うこととした。

拡幅整備に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成26年５月16日、隣接する国道４号拡幅整備地内の発掘調査に係る協議の折に、宇都宮土木事務所より栃木県教育委員会事務局文化財課（以下、文化財課と略す）に照会があった。国道４号拡幅整備地は近世の雀宮宿跡と重なり、本陣跡や仮本陣跡などが所在していることから、発掘調査を実施する方向で進められていた。文化財課では一般県道雀宮停車場線拡幅事業地はその隣接地にあたるため、埋蔵文化財の広がりがどこまで認められるのか、また、工事による埋蔵文化財への影響の有無を確認するために、試掘調査を実施することとした。

試掘調査は５月29日に行われ、対象地区の調査可能



第１図　雀宮宿跡位置図



第２図　遺跡の位置と地形図

な箇所に１×３ｍのトレンチを９本設定した（Ｔ１～Ｔ９）。その結果、国道４号に近いＴ１・Ｔ２とＪＲ雀宮駅寄りのＴ７～Ｔ９で遺構、遺物が確認されたため、本調査を実施する必要がある旨、文化財課から関係機関に報告された。ちなみにＴ２は仮本陣が所在したとされる地点である。これに基づき８月19日、発掘調査の実施にむけて、県土整備部都市整備課、宇都宮土木事務所、文化財課、公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターの間で協議が行われた。

協議では、①発掘調査は工事業者が決定後の10月から実施する。②調査箇所は自転車及び歩道部分のうち、試掘調査で遺構を確認したＴ１・Ｔ２付近の国道４号との交差点から東に約40ｍ分の南北両側と、Ｔ７～Ｔ９付近のＪＲ雀宮駅に取りつく市道704号線の西約70ｍ分のうち南側の合わせて１,160㎡を対象とする。③歩道部分は現在仮舗装で使用しているため、通行に支障のないように半分幅ずつ行うこと、などが確認された。

これを受けて平成26年10月１日付けで栃木県と公益財団法人とちぎ未来づくり財団は埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

第２節　調査の方法と経過

今回の対象となるのは自転車及び歩道部分の細長い範囲約1,160㎡である。民家に面した部分であり、県道への出入り口を確保することや、現在も歩道として使われているため歩行者の通行を妨げないように作業することなど、種々の制約のもとで実施した。

調査区は国道４号寄りのうち車道の北側を１区、南側を２区、ＪＲ雀宮駅寄りの西方を３区、東方の市道704号に取りつく部分を４区とした。各調査区は長さ１～４ｍのトレンチを任意に設定し、通行に支障のないように半分幅ずつ調査したため最小単位として、ａ・ｂ・ｃ･･･とアルファベットの枝番をつけた。結果的に１区はａ～ｆ、２区はａ・ｂ、３区はａ～ｆ、４区はａ・ｂの調査区があることになる。なお２ｂ区については遺構が確認されなかった。

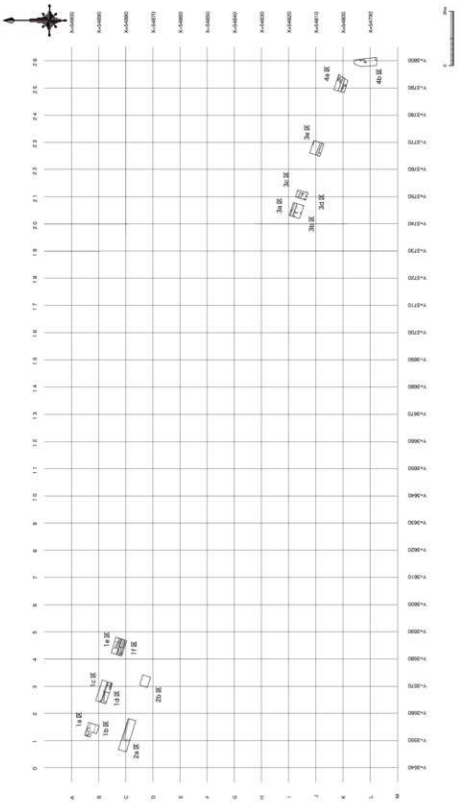
調査の手順は、まず、①仮舗装のアスファルトや転圧した砂利等があるため重機で遺構確認面まで掘り下げ、②遺構を確認し、③遺構精査の後、④写真撮影（35㎜リバーサルフィルムとモノクロフィルム）・図面作成（縮尺１/20）をし、⑤埋め戻しを行う。歩行者の通行を妨げないようにし、かつ歩行者の安全を最優先することから、数カ所同時並行で調査するのは適切ではなく、トレンチごとに①から⑤まで一連の作業を完結させていった。なお、交通量の多い地区での調査のため、安全対策には十分配慮することは言うまでもなく、常に安全柵で調査箇所を囲い、注意を喚起する看板を掲示して進めた。また、常時作業しているトレンチは１カ所でしかも狭く多くの作業員を配置することができないため、作業員は３名で行ったが、安全管理上は細かい指示や対応が可能であった。

発掘調査は平成26年10月から開始した。準備として上旬を書類等の作成にあて、中旬から現地の調査に着手した。前記したようにトレンチごと一連の作業を順次繰り返し、10月中には１区ａからｆの６か所の調査を終了した。11月に入って２～４区（都合９か所）の調査を進め、中旬までに精査、埋め戻しを終了し、下旬に残務・撤収を行い、11月末で現地発掘調査をすべて終了した。実質の調査面積は合計で206.52㎡、出土した遺物は収納箱（39×59×21㎝）５箱分である。なお、基準点測量、航空写真撮影、遺構平面図編集トレース作業は外部委託している。

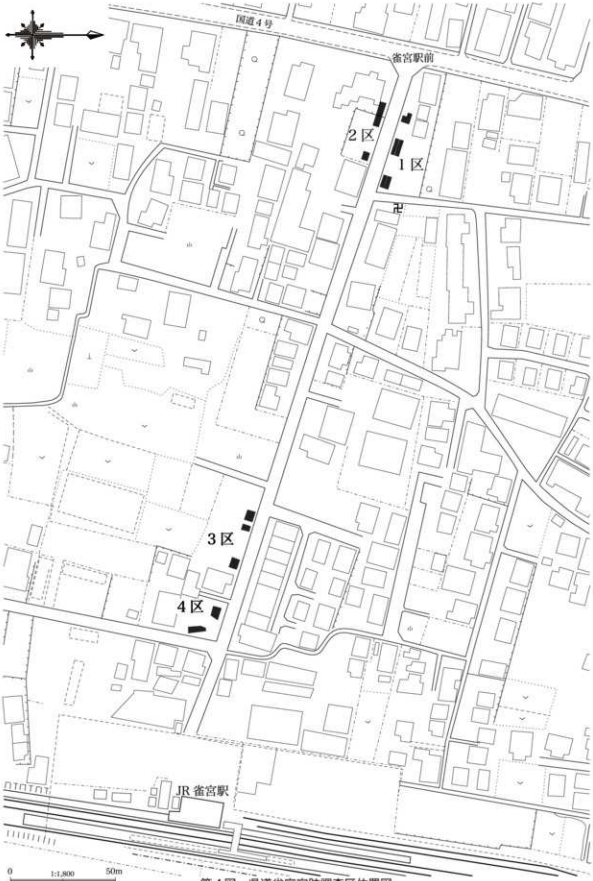
整理作業及び報告書作成は翌平成27年度に実施した。

写真類の整理はリバーサル、モノクロともにフィルム７本分の注記をし、アルバムを作成した。現地で作

成した図面類は平面図・断面図等25枚分で、その修正を行った。遺物については洗浄の後、掲載遺物の選別を行い、掲載遺物約120点を選別、実測した。遺構図面はデジタルトレースをして図版作成し、遺物図面はトレース後、スキャニングして図版を作成した。併せて遺物写真撮影、版組、原稿執筆を行い、平成28年３月の報告書の刊行をもって雀宮宿跡発掘調査は完了した。



第３図　雀宮宿跡全体図とグリッド配置図



第４図　県道雀宮宿跡調査区位置図

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

雀宮宿跡は栃木県中央部の宇都宮市雀宮、JR雀宮駅西口から国道４号沿いに所在する。

栃木県は、関東地方の北部中央に位置する内陸県である。東西に75km、南北に98km、面積は約6,400㎡である。西に群馬県、東に茨城県、南に埼玉県・茨城県、そして北に福島県が隣接する。地形的には、東部山地・西部山地・中央部平地に大きく分けられる。

東部山地とは、福島県と茨城県の県境に沿って南北に連なる八溝山地のことである。八溝山(1,022m)を主峰に鷲子山地、鶏足山塊、そして茨城県内の筑波山塊と南下するほどに標高が低くなる。各山塊とも那珂川などの影響で浸食が進み、多くの谷が発達している。

西部山地とは、福島県と群馬県の県境に沿って南北に連なる山塊である。北部から那須火山・高原火山・帝釈山地・日光火山・足尾山地の５稜域にわかれる。群馬県境にわたる帝釈山地は白根山(2,578m)を最高峰とし、2000m級の山岳が連なる。足尾山地へ南下していくほどに標高が下がる。

そして、東部山地と西部山地の間に中央部平地が広がる。丘陵・台地・低地から成り、北から、高久丘陵、那須野が原、喜連川丘陵、県中南部の台地、低地の４地形に分けられる。宇都宮市以南は、台地と低地から成り、南下するほどに開け、いわゆる関東平野の一部となる。

宇都宮市は栃木県の中央部を北から伸びてくる阿武隈構造谷の南麓部にあたり、地形上の転換点にあたる。山地、丘陵、台地、低地から形成される。雀宮宿跡は、田川と姿川の低地に挟まれた宝木台地に位置する。宝木台地とは、宇都宮市西部から県南部の小山市まで広く分布している台地である。東西６～７kmの幅で分布し、標高は徳次郎付近では210m、雀宮付近で90mで、かなり南に傾斜している。姿川低地との比高差は３～５mほどで、田川低地との比高差は10m前後である。細かい谷が発達しているのが特徴である。宝木ローム層とも呼ばれ、厚さは約４m、上部ローム層、鹿沼軽石層、下部ローム層からなる。

姿川低地は、雀宮宿跡の東側にある姿川が形成した低地である。鹿沼扇状地から武子川や宇都宮西部から集水して小山市と合流する。宝木面とは急崖で接している。幅500m～1300mの樹枝状に低地が広がる。

田川低地は、雀宮宿跡の東側にある田川が形成する低地である。宇都宮市の中央部を南流する田川に沿って発達する谷底平野である。流路が長いが流域面積や谷底の幅は狭い。

現 状　道路及び宅地である。

参考文献

栃木県史編さん委員会編1976　『栃木県史』資料編　考古１
宇都宮市史編さん委員会編1979　『宇都宮市史』原始・考古編

第２節　歴史的環境

江戸時代において、街道の整備に不可欠なのは、宿駅の設置であった。宿駅とは、江戸幕府公用の荷物などを伝馬でつないで目的地まで運ぶための宿場である。伝馬制の起源は古代までさかのぼることができるが、江戸時代のそれは戦国大名の制度を継承した側面が大きい。

しかし、下野国を統一的に支配する戦国大名はおらず、彼らによる統一的な伝馬制が敷かれていなかっ

第５図　雀宮宿跡位置図及び周辺の遺跡

第１表　周辺の遺跡

NO.	遺跡名	時期（型式）	NO.	遺跡名	時期（型式）	NO.	遺跡名	時期（型式）
1	亀が塚古墳群	古墳	66	下桑島西原古墳群		131	赤岩遺跡	縄文・古墳
2	上鵜田南遺跡	奈良・平安	67	南原古墳	古墳	132	宇都宮機器南遺跡	古墳
3	宇都宮城跡	鎌倉～江戸	68	砂田遺跡	古墳・奈良	133	双子塚古墳	古墳
4	戸田氏の墓所	戦国～明治	69	上横田A遺跡	古墳・歴史	134	原遺跡	古墳～平安
5	浦生君平勤施碑	明治	70	大関台遺跡	奈良・平安	135	笠塚古墳	古墳
6	観音塚古墳	古墳	71	小屋原遺跡	奈良・平安	136	原古墳群	古墳
7	下河原遺跡	奈良	72	大関高塚群	江戸	137	車塚古墳群	古墳
8	旭陵遺跡	縄文	73	中道遺跡	奈良・平安	138	鶴舞塚古墳	古墳
9	不動前3丁目遺跡	奈良・平安	74	砂田姥沼遺跡	古墳～平安	139	松の塚古墳	古墳
10	宇大南遺跡	縄文～奈良	75	西刑部西原遺跡	古墳～平安	140	権現塚古墳	古墳
11	宇大南第二遺跡	縄文～鎌倉	76	古屋原遺跡	江戸	141	上石田遺跡	古墳～平安
12	新谷台遺跡	古墳	77	中鳥笹塚遺跡	古墳～平安	142	百目鬼遺跡	
13	三日月神社古墳	古墳	78	後美塚遺跡	奈良・平安	143	徳岡・西汗古墳群	古墳
14	三日月神社南古墳	古墳	79	北若松原遺跡	古墳・奈良	144	西赤堀東遺跡	古墳～平安
15	久部浅間山古墳	古墳	80	塚山北遺跡	古墳	145	並木遺跡	縄文・古墳・奈良
16	久部愛宕塚古墳	古墳	81	小野原遺北遺跡	縄文（中期）	146	三ツ矢遺跡	縄文・奈良
17	不動前5丁目遺跡	奈良・平安	82	加ｽｰﾊﾟｰｾﾝﾀｰ前遺跡	縄文（加Ｅ）	147	西根	古墳～平安
18	隠南荘付近A遺跡	縄文・古墳	83	塚山古墳群	古墳	148	鳴神遺跡	縄文・奈良
19	隠南1丁目遺跡	奈良～鎌倉	84	二軒屋遺跡	弥生・古墳	149	赤土山遺跡	縄文・奈良
20	本村遺跡	弥生・古墳	85	若松原遺跡	縄文・古墳	150	富士見団地北遺跡	縄文・古墳
21	本村古墳群	弥生・古墳	86	一向寺別院付近遺跡	古墳	151	岡田山遺跡	古墳～平安
22	河原ヶ沼遺跡	奈良	87	本田扶研西遺跡	縄文	152	畑中	縄文・古墳～平安
23	西原境遺跡	縄文・古墳～平安	88	留西遺跡	縄文～古墳	153	石川坪遺跡	
24	台内手遺跡	古墳・奈良	89	西原北遺跡	縄文～古墳	154	富士見向山遺跡	古墳・奈良
25	並塚遺跡	古墳	90	東屋敷遺跡	縄文	155	東根古墳	古墳
26	ヤジカ遺跡	奈良	91	旭ヶ丘団地北遺跡	縄文	156	東明神社古墳	古墳
27	ガンセンター東遺跡	奈良・平安	92	留西南遺跡	古墳・奈良	157	多功神塚古墳群	古墳
28	茗荷沢遺跡	縄文・古墳	93	若松原南遺跡	古墳	158	茂原北原遺跡	奈良
29	並松遺跡	古墳～平安	94	下原遺跡	古墳・歴史	159	権現山北遺跡	旧石器・弥生・古墳～平安
30	江曽島北原遺跡	古墳～平安	95	堂前東遺跡	古墳・奈良	160	権現山古墳群	古墳
31	関道遺跡	古墳～平安	96	兵庫塚西原遺跡	古墳・奈良	161	愛宕塚東遺跡	古墳・奈良
32	江曽島北原南遺跡	縄文・奈良	97	十里木遺跡		162	大日塚古墳	古墳
33	大山城神社古墳	古墳	98	被女塚古墳	古墳	163	西の前遺跡	奈良
34	大房林遺跡	古墳～平安	99	雀宮東浦遺跡	奈良	164	愛宕塚古墳群	古墳
35	山ノ神遺跡	縄文	100	雀の宮四丁目遺跡	古墳	165	江面遺跡	奈良
36	自動車教習所遺跡	縄文（中期）	101	赤沢高塚群	江戸	166	小篠遺跡	奈良
37	藤本館跡	室町	102	立野遺跡	古墳～平安	167	前畑遺跡	奈良
38	おしの尽遺跡	古墳～平安	103	平内遺跡	奈良	168	西下谷田遺跡	奈良・平安
39	北之原遺跡	奈良・平安	104	鶴岡北遺跡	古墳～平安	169	上原	縄文・古墳～平安
40	下東大屋古墳	古墳	105	琴平塚古墳群	古墳	170	明ノ内	古墳～平安
41	下栗金仏塚遺跡	奈良	106	西沼遺跡	奈良・平安	171	東根	古墳～中世
42	下栗金仏像1420	古墳	107	内野遺跡	古墳～平安	172	下古山北原古墳	古墳
43	大塚神社古墳群		108	不動原遺跡	奈良・平安	173	北原	古墳～平安
44	十ヶ屋敷遺跡	古墳～平安	109	平塚原根岸遺跡	古墳～平安	174	茂原向原遺跡	古墳・平安
45	迫金仏遺跡	縄文・古墳	110	南浦遺跡	縄文・奈良	175	上神主・茂原遺跡	奈良・平安
46	天王塚古墳群	古墳	111	下小屋原遺跡	奈良・平安	176	上神主廣寺址	奈良
47	宇東高西遺跡	縄文	112	幕田古墳群	古墳	177	後志部遺跡	縄文～平安
48	石井久保田古墳群	古墳	113	上坪遺跡	弥生～奈良	178	向原遺跡	縄文～平安
49	大久保台山遺跡	古墳～平安	114	針ヶ谷新田古墳群	古墳	179	大木遺跡	古墳～平安
50	天王山古墳群	古墳	115	上坪新田遺跡	縄文～奈良	180	一本松	古墳～平安
51	東原古墳群	古墳	116	大谷田遺跡	奈良・平安	181	文珠山古墳	古墳
52	さるやま城遺跡	鎌倉	117	雀宮駅東遺跡	奈良	182	若林北	古墳～平安
53	さるやま城古墳群	古墳	118	熊野神社南遺跡	奈良	183	上神主神社古墳群	古墳
54	笛谷遺跡	古墳～平安	119	立海道遺跡	古墳・奈良	184	殿山遺跡	奈良～
55	赤沢遺跡	縄文・平安	120	星の宮遺跡	古墳	185	後志部東遺跡	古墳～平安
56	さる山天満宮古墳	古墳	121	見明遺跡	縄文・弥生・奈良	186	上ノ原遺跡	弥生
57	猿山遺跡	奈良・平安	122	二子塚古墳	古墳	187	上郷古墳群	古墳
58	西原房中塚	近現代	123	天狗原雀宮中前遺跡	縄文～古墳	188	西赤堀南遺跡	奈良・平安
59	城南三丁目遺跡	奈良・平安	124	牛塚東遺跡	奈良	189	西田遺跡	古墳
60	星の宮神社北遺跡	奈良・平安	125	牛塚古墳	古墳	190	願成寺遺跡	古墳
61	城南三丁目南遺跡	奈良・平安	126	西下谷田遺跡	奈良・平安	191	仏沼遺跡	先土器・縄文・古墳～平安
62	宮の内遺跡	古墳・歴史	127	稲荷塚古墳	古墳	192	西林ノ内遺跡	縄文・古墳～平安
63	瑞穂野団地遺跡	旧石器・古墳	128	杉村遺跡		193	鍋小路	縄文・古墳～歴史
64	桑島台古墳群	古墳	129	西赤堀遺跡	奈良・平安	194	鍋小路古墳群	古墳
65	藤腰遺跡	古墳～平安	130	島の前遺跡	縄文・古墳・奈良	195	惣宮遺跡	古墳～平安

た。そのうえ、当時の関東の中心は相模国鎌倉であり、江戸から日光に向かう日光道中[1]は成立していなかったと推測される。[2] 下野国の伝馬制に関わる史料をあげるとすると、天正５年（1577）４月15日付北条氏照朱印状写に小山と栗橋の間[3]に伝馬制が敷かれていることが確認され、年未詳６月付の北条家伝馬手形写に「自佐野関宿まで宿中」とある。[4] 前者は日光道中と重なっているが、その間にある間々田宿は元和４年（1618）に、野木宿は天正14年から慶長7年（1602）に成立したとされ、[5] 両宿は戦国末から江戸時代初頭にかけ成立したのである。後者は下野国佐野の領主佐野氏と後北条氏同士でやり取りをするときに出されたものであろう。佐野と関宿の間にある宿は栗橋や古河などが考えられ、日光道中と重なるのは、当地ぐらいと考えられる。小山や佐野といった下野南部の北条氏領には伝馬宿が存在した。

次に下野国の関係での伝馬関係史料は、慶長７年の宇都宮町中に宛てた徳川家による地子免許状である。[6] 宇都宮町中の地子を免除する代わりに、「公儀之伝馬、当領主定役」を負担しなさいという内容である。地子免許はこの前年から実施されているようである。この時点では、まだ徳川家康は征夷大将軍には任ぜられてはいないため（慶長８年に任ぜられ、まだ正式に公儀といえる立場ではなかった）、これは、いわゆる豊臣家の五大老という地位から出されたものと考えられる。つまりここでいう「公儀」とは豊臣公儀[7]を指す可能性が高い。

雀宮宿の成立を直接示す史料は残されていないが、寛文８年（1668）の「日光街道雀宮・石橋両宿諸役免許状[8]」からうかがい知ることができる。それによれば、雀宮宿と石橋宿は「□高ノ諸役」と「田方掛物」を、50年前から御成道中及び奥州道中の将軍日光社参の際、御通の御役目を果たしているため、御赦免されてきたとある。つまり、両宿は元和５年には宿として機能していたことになる。徳川家康が元和３年に日光に祀られ、2代将軍秀忠が４月には社参していることから、この頃には雀宮宿らは整備されたと考えられる。

天保の末年頃に成立したという『日光道中略記』[9]によると、雀宮宿の成立は、下横田村から分かれたのが最初である。下横田村よりも標高の高い場所に分村し、その村を台横田村と称した。その場所は、現在の雀宮よりも東の中世の奥州古道の周辺であったという。元和年中に日光道中が開けてからは街道の周辺に移り、雀宮明神に近い所に宿を開いたため、雀宮宿となのるようになった。そして、江戸時代の当初は、宇都宮藩の藩領であったが、正徳元年（1711）には、天領となり幕末まで続くのである。

雀宮宿は、天保15年（1845）で石高574石６斗５升５合、人口268人、家数72軒、本陣1軒・脇本陣1軒・旅籠屋38軒、御定人馬は25人・25匹であった。旅籠屋経営以外では、五穀、野菜、荏胡麻などを作る農家、茶屋、商人も住んでいる宿場であった。[10]

註

（1）享保元年（1716）新井白石が日光・奥州・甲州の各「海道」を各「道中」と改称し、統一した。

（2）中世の鎌倉～下野の道については、齋藤慎一「鎌倉街道上道と北関東」（浅野晴樹・齋藤慎一編『中世東国の世界Ⅰ北関東』高志書院、2003）、同「鎌倉街道中道と下野国」（栃木県立文書館編『戦国期下野の地域権力』岩田書院、2010）が詳しい。

（3）杉山博・下山治久編『戦国遺文　後北条氏編』第３巻1903号文書（東京堂出版、1993）。

（4）杉山博・下山治久編『戦国遺文　後北条氏編』第５巻3805号文書（東京堂出版、1995）。

（5）間々田宿、野木宿の成立については、『日光道中略記』の記載による。

（6）「慶長７年徳川家地子免許状」（『栃木県史』史料編　近世１、1974）660頁

（7）豊臣秀吉死後の豊臣公儀については、笠谷和比古『関ヶ原合戦と近世の国制』（思分閣出版、2000）等を参照のこと。

（8）「日光街道雀宮・石橋両宿諸役免許状」（『栃木県史』史料編　近世１）667頁

（9）『日光道中略記』の記載は今井金吾監修『道中記集成』第14～16巻（大空社、1996）を使用した。

（10）「日光道中　雀宮宿」（『宇都宮市史』第五巻　近世史料編Ⅱ、1981）38～50頁

第３章　検出された遺構と遺物

第１節　調査の概要

今回の調査は、国道４号からＪＲ東北本線雀宮駅へ続く県道雀宮停車場線の拡幅工事に伴い実施されたものである。そのため、拡幅部分だけの調査となった。この工事では東西に延びる現道の両側を拡げることが目的で、調査区は道の両側の拡幅部分に設定した。また、栃木県教育委員会文化財課の試掘調査により、遺構がなかった箇所は今回の調査範囲から除外した。

ここから、調査区を４地点にわけ、国道４号に近い方、県道の北側から順に数字で番号を付けた（１～４区）。また、民家などから県道への出入り口を確保することと、さらに２区以外は現在歩道として使われているので、歩行者の通行を妨げないようにするため、一つの調査区をさらに分けた。その小さい調査区をアルファベットの小文字で表し、例えば１ａ区とした。１区はａ～ｆ、２区はａ・ｂ、３区はａ～ｆ、４区はａ・ｂに分けた。

２区以外の調査区では、一旦仮舗装がなされており、上層は表土がなく、その代わりに道路のアスファルト、砂利を転圧した層、そして転圧されていない砂利層である。

１区の層序は、道路に関わる層があり、その下層は、黄色粒子の混じる暗褐色土である。１ａ～１ｃ区は、その上層よりも黄色味を帯びる暗褐色土が遺構確認面であった。１ｄ～ｆ区は仮舗装道路に関係する層の下層は先の調査区と同様であるが、遺構確認面は暗黄色の漸移層であった。

１区は、国道に近いこともあり、近世の雀宮宿に関連すると思われる遺構・遺物が発見されている。

１ａ・ｂ区の中央部に、現道（県道）に沿う形で、近代に敷設された水道管が東西にとおっており、１ｂ区では遺構の発見に至らなかった。１ａ～ｄ区では、遺構確認面がローム層にまで達せず、暗褐色土層が遺構確認面となった。１ｄ区では近世の雀宮宿の宿に関連する蔵の地下室と考えられる遺構を検出している。

１ｅ・ｆ区ではローム層が遺構確認面であった。１ｄ区内の東からｆ区へ、１ｅ区内の東側では、時期不明の東西方向の溝が確認されている。この遺構は日光道中に沿うものではなく、宿の建物と関連も低いと考えらることから、宿場跡とは関係のない遺構と思われる。

２区は仮舗装がされておらず、層序は、１層が表土、その下層は、２区両区とも人為的に埋め戻されている層であった。ｂ区は、その人為的に埋め戻された層が、ａ区の遺構確認面よりも深い場所まで達しており、遺構の検出には至らなかった。また、ａ区の遺構確認面は暗褐色土層であった。２ａ区の西側は、元は仮本陣の敷地内であり、近世以降の宿に関連する遺構を検出した。それは、近世の雀宮宿の仮本陣の蔵の地下室と思われる遺構を確認し、多くの出土遺物があった。

３区は、仮舗装道路に関する層の下層は、黄色土を含む暗褐色土で、そして、遺構確認面は暗黄褐色土層であった。４区は仮舗装道路に関係する層が、他の調査区よりも深い所まで達していたが、その下層は他の調査区と同じように暗褐色土層、遺構確認面の順で層序をなしていた。

３・４区は、３区を東西に貫き、さらに４ａ区にまで達する平安時代の溝を確認した。その周辺には小穴を多く検出しており、調査区が狭いため、溝との関係を見出せなかった。４区では、古代の遺物も少量であるが出土していることから、この地点は、古代の遺構が多くありそうである。また、近世の陶磁器が出土している遺構もあり、古代と近世の２時期の遺跡になる。

第２節　検出された遺構と遺物

（１）１区の遺構と遺物

ＳＫ－１（第６・７図、第２表）

位置　Ｂ－１　内容　不整円形の土坑である。南側は、近現代の水道管に伴う溝によって壊されており、南北の規模は不明である。東西 1.58mで、深さは遺構確認面から 0.2mである。覆土は暗褐色土の自然堆積である。遺構断面は、壁はゆるやかに立ち上がり、皿状の形状をなしている。出土遺物は、近世の磁器 17 点、陶器 12 点、土師質土器２点、瓦５点、鉄器１点出土している。近代の陶器も出土している。遺構に伴うものかはよくわからないが、そのうち近世の瀬戸・美濃系の磁器１点と中世末に属すると思われるおろし皿１点、鉄器１点を図示した。

ＳＫ－２（第６図）

位置　Ｂ－１　内容　ＳＫ－４と切りあっている。当遺構の方が新しい。遺構の西側は調査区の外にあり、形状などは不明である。南北 0.54mで深さは遺構確認面から 0.18mである。遺構の断面は比較的急に立ち上がっている。覆土は、暗褐色土で自然堆積である。出土遺物は無い。

ＳＫ－３（第６・７図、第２表）

位置　Ｂ－１　内容　遺構の北側は調査区の外にあり、規模・形状は不明である。確認できる規模は0.5m、深さは遺構確認面から 0.2mである。覆土は茶褐色と暗褐色土の２層で、自然堆積である。出土遺物は、陶器の小皿１片出土しており、図示した。中世末ぐらいものである。他に磁器片２点、鉄釉の陶器片が１点、陶器片３点、焙烙鍋の底の破片１点出土しているが、小片のため図示はしていない。

ＳＫ－４（第６図）

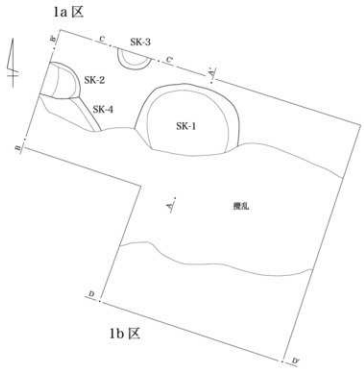
位置　Ｂ－１　内容　遺構は、西側は調査区の外にあり、北側はＳＫ－２に切られ、南側は水道管の攪乱により壊されているため、規模・形状ともに不明である。覆土はローム粒子が少量、ロームブロックをわずかに含む暗褐色土で、自然堆積である。出土遺物は無い。

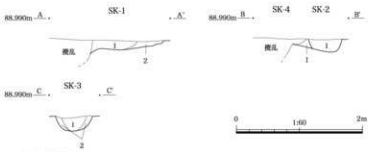
ＳＤ－５（第 14 図）

位置　Ｃ－４　内容　遺構の西側は攪乱されており、遺構東西の規模は不明である。また、遺構東側は、上部は攪乱されていたが、遺構の下部が残っていた。この遺構は、ローム層を掘り抜いている。溝の幅は 0.78m、深さは遺構確認面から 0.36mである。覆土は、１層がローム粒子を少量含む暗褐色土、２層がローム粒子を含む暗黄褐色土、３層がロームブロックを多く、ローム粒子を含む暗黄褐色土の３層に分かれ、自然堆積である。出土遺物は無い。

ＳＫ－６（第９・11 図、第５表）

位置　Ｃ－２　内容　遺構の西側および南側は調査区外にあり、規模・形状ともに不明である。深さは遺構確認面から 0.27mである。覆土は、暗褐色土の単層であり、自然堆積である。ガラス片が出土していることから、近代以降の遺構である。出土遺物は近世の磁器の皿と近代のものと思われる仏花瓶が出土しており、図示した。他に近世の磁器片２点、陶器６片点、焙烙鍋片１点、すり鉢１点が出土しているが、小片のため、図示していない。





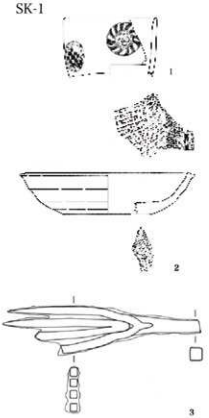
1a区　土層説明

SK－１　１　暗褐色土　ローム粒子少量、赤色粒子含む。しまりあり。粘性ややあり。
　　２　暗褐色土　白色粒子少量含む。しまりややあり。粘性ややあり。
SK－２　１　暗褐色土　ロームブロック少量含む。しまり強い。粘性ややあり。
SK－３　１　暗褐色土　白色粒子少量含む。しまりややあり。粘性ややあり。
　　２　茶褐色土　ローム粒子少量含む。しまり強い。粘性ややあり。
SK－４　１　暗褐色土　ロームブロックわずか、ローム粒子少量含む。しまりややあり。粘性ややあり。

南壁セクション

１　暗褐色土　ロームブロック少量含む。ローム粒子少量含む。しまりあり。粘性ややあり。

第６図　1a・b 区遺構実測図



第７図　1a 区出土遺物

第８図　1b 区出土遺物

ＳＫ－７（第９図）

位置　Ｃ－２　内容　不整円形の小穴である。径0.26m、深さ 0.08mを測る。壁は開くように立ち上がっている。覆土は、白色粒子が混ざる暗褐色土で、単層である。自然堆積である。出土遺物は無い。

ＳＤ－８（第９図）

位置　Ｃ－２・Ｃ－３　内容　ＳＫ－９と重複しており、ＳＫ－９が当遺構を壊している。遺構の東側は、隣の調査区１ｆ区のＳＤ－13 に続くものと考えられ、同一の遺構であろう。ローム層を掘り抜いている。幅 0.34m、深さ 0.25mを測る。覆土は、ローム粒子が混じる暗褐色土の単層で、自然堆積である。出土遺物は無い。

ＳＫ－９（第９図）

位置　Ｃ－３　内容　不整形の土坑である。ＳＤ－８と重複しており、ＳＤ－８を壊している。長軸 0.65m、短軸 0.55m、深さ 0.10mを測る。覆土は、ロームブロックが少量混じる暗褐色土の単層で、自然堆積である。出土遺物は無く、時期は不明である。出土遺物は無い。

ＳＫ－10（第９図）

位置　Ｃ－３　内容　遺構北側は、調査区外にあり、規模・形状ともに不明である。短軸を検出しており 0.43m、深さは 0.08mを測る。覆土は、ローム粒子を含む暗褐色土の単層で、自然堆積である。出土遺物は無い。

ＳＫ－11（第９図）

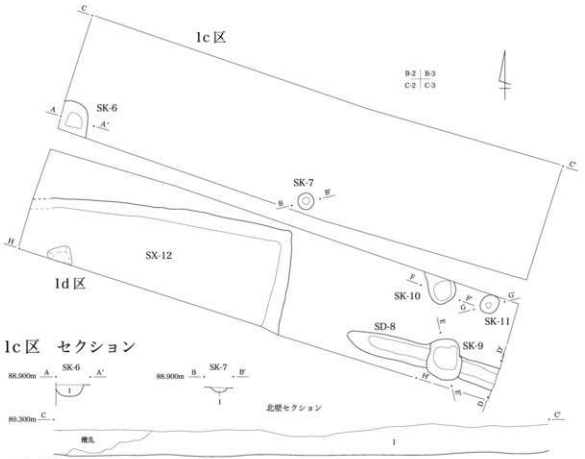
位置　Ｃ－３　内容　不整円形の小穴である。長軸 0.3m、短軸 0.28m、深さ 0.07mを測る。ローム層を掘り抜いている。覆土はロームブロック少量、ローム粒子を含む暗褐色土で、単層である。出土遺物は無い。

ＳＸ－12（第９・11・12 図、第６表）

位置　Ｃ－２　内容　遺構の西側および南側は、調査区外にあり、規模は不明である。遺構の北東隅を検出しており、平面の形状は方形もしくは長方形と考えられる。ローム層を掘り抜いており、深さは遺構確認面から 0.6mを測り、底面は比較的平らである。壁の立ち上がりは底面に近いところはほぼ垂直で、上部は遺構外側に向かって開いている。覆土は、上層は大量のロームブロックが混じる暗褐色土である。下層は、ロームブロックや礫を含む暗褐色土である。土層断面の観察から、遺構の外側から土を流し込んでいることが確認でき、当遺構は人為的に埋め戻されている。この地点は、仮本陣の周辺であり、『日光道中絵図』（国立公文書館所蔵）の当地点の辺りには、蔵が表現されている。そのため、雀宮宿の宿屋に付属する蔵の地下室と考えられる。出土遺物は、近世から近代の陶磁器が大量に出土している。陶磁器 25 点を図示した。

ＳＤ－13（第 14 図）

位置　Ｃ－４　内容　遺構の西側および東側は調査区外に伸びており、規模・形状ともに不明。ただし、遺構西端は、１ｄ区のＳＤ－８につながると考えられ、Ｃ－２グリッドで収束するものと思われる。ＳＫ－14・15・17・18・19 と重複している。ＳＫ－19 はこの遺構を壊しており、あとは当遺構がほかの土坑を切っ



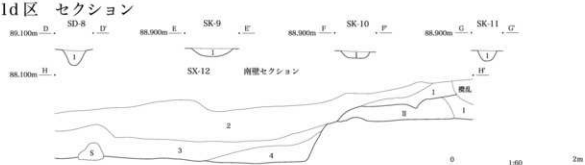
1c 区　土層説明

SK－６　Ⅰ　暗褐色土　ローム粒子多く、ロームブロック少量、礫少量含む。粘性ややあり。しまりややあり。

SK－７　Ⅰ　暗褐色土　白色粒子微量、暗黄褐色土少量含む。粘性ややあり。しまりややあり。

北壁セクション

Ⅰ　暗褐色土　ロームブロック少量、ローム粒子少量含む。しまりややあり。粘性ややあり。



1d 区　土層説明

SD－８　Ⅰ　暗褐色土　ローム粒子少量含む。しまりあり。粘性ややあり。

SK－９　Ⅰ　暗黄褐色土　ロームブロックわずか、ローム粒子少量含む。しまりあり。粘性弱い。

SK－10　Ⅰ　暗黄褐色土　ローム粒子多く含む。しまりややあり。粘性ややあり。

SK－11　Ⅰ　暗褐色土　ロームブロック少量、ローム粒子含む。しまりややあり。粘性ややあり。

SX－12　Ⅰ　暗褐色土　ロームブロック多く、ローム粒子やや含む。しまりあり。粘性ややあり。

２　暗黄褐色土　ロームブロック多量、ローム粒子多量に含む。しまりあり。粘性ややあり。

３　暗褐色土　ロームブロック少量、礫含む。しまりあり。粘性ややあり。

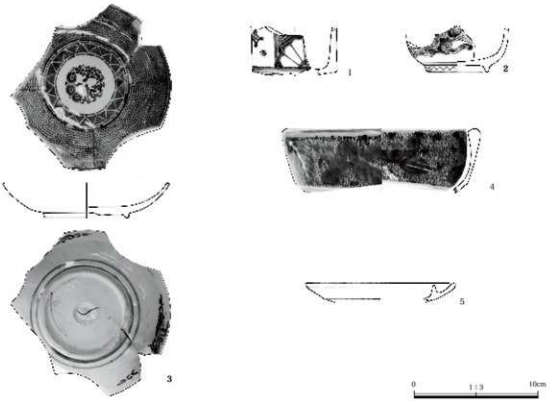
４　暗褐色土　ロームブロック、ローム粒子多量に含む。しまりややあり。粘性ややあり。

南壁セクション

Ⅰ　暗褐色土　ロームブロック少量含む。しまりややあり。粘性ややあり。

Ⅱ　暗褐色土　暗黄褐色土含む。しまりややあり。粘性ややあり。

第９図　1c・d 区遺構実測図



第 10 図　1c 区出土遺物

ている。幅 0.63m、深さ 0.3mを測る。この地点の覆土は、上層がローム粒子を含む暗褐色土で、下層がロームブロックとローム粒子が混じる暗褐色土である。自然堆積である。出土遺物は無い。

ＳＫ－14（第 14 図）

位置　Ｃ－４　内容　遺構北側は、ＳＤ－13 に壊されており、元の遺構の形状は不明である。残っている遺構の規模は 0.53mで、深さは 0.2mである。ローム層を掘りこんでいる。覆土は、ローム粒子を多く含み、ロームブロックが少量混じった暗黄褐色土の単層である。自然堆積である。出土遺物は無い。

ＳＫ－15（第 14 図）

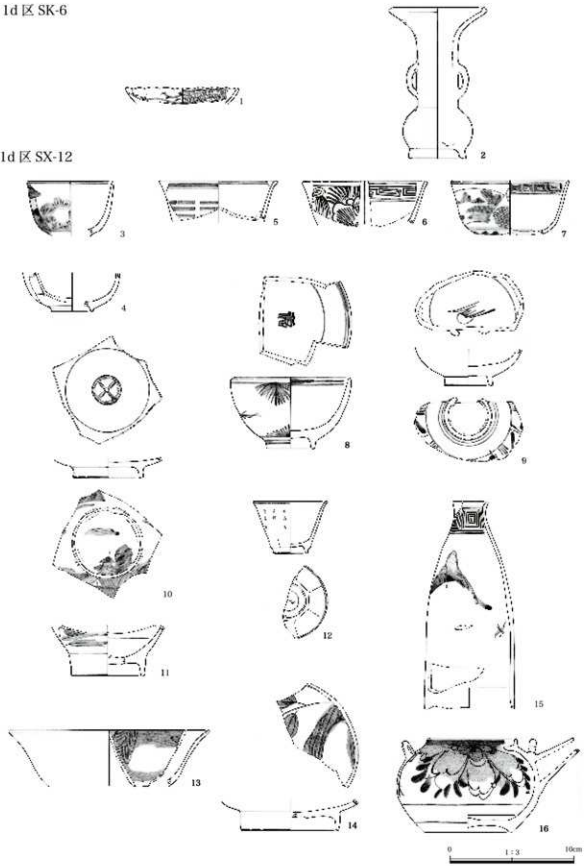
位置　Ｃ－４　内容　遺構北側は、ＳＤ－13 により壊されており、元の遺構の形状は不明である。残存している遺構の平面の規模は 0.56m、深さ 0.2mを測る。ローム層を掘りこんでいる。覆土は、ローム粒子を多量に含み、ロームブロックがわずかに混じっている暗黄褐色土の単層である。自然堆積である。出土遺物は無い。

ＳＫ－16（第 14 図）

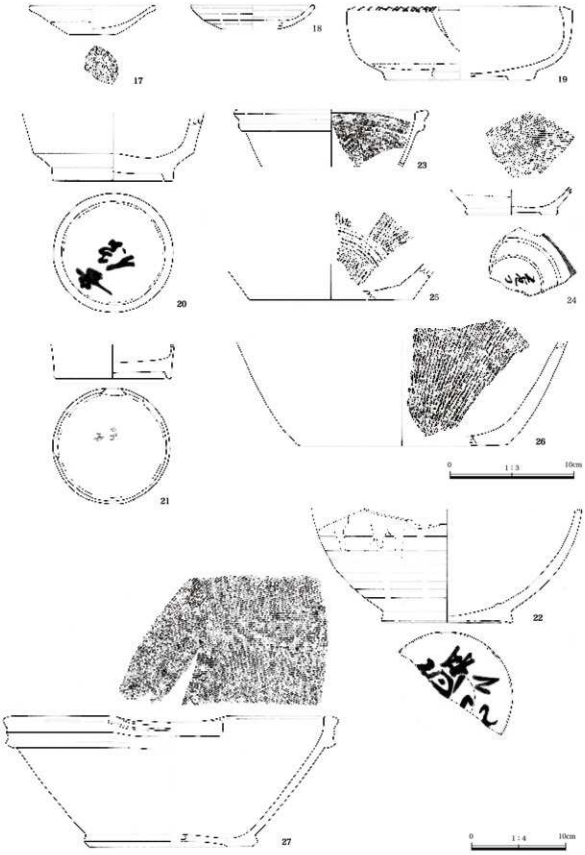
位置　Ｃ－４　内容　遺構の南側は、調査区の外にあり、遺構全体の形状や規模は不明である。検出できた平面規模は 0.3m、深さは、遺構確認面から 0.14mである。ローム層を掘りこんでいる。覆土は、暗黄褐色土が少量、ローム粒子、ロームブロックが少量混じっている暗褐色土の単層である。自然堆積である。出土遺物は無い。

1d 区 SK-6

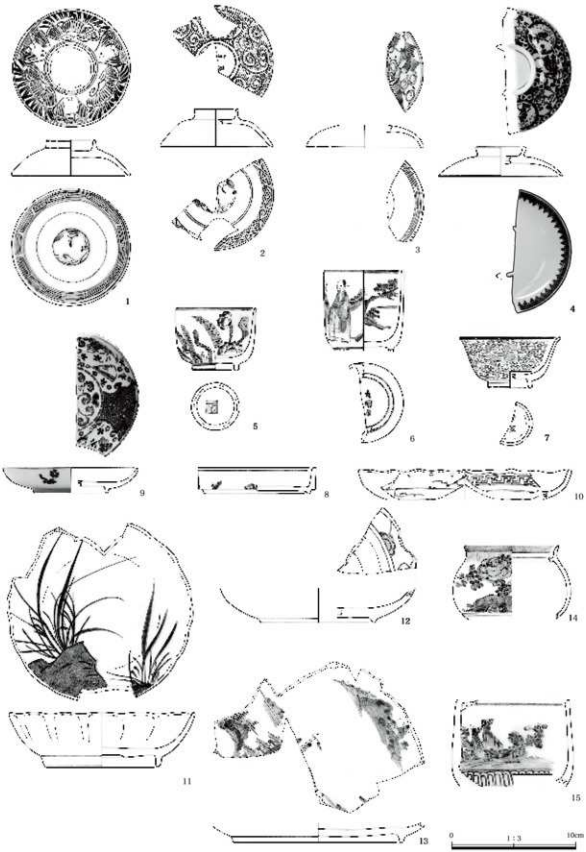
1d 区 SX-12



第 11 図　1d 区 SK-6・SX-12 出土遺物



第 12 図　1d 区 SX-12 出土遺物



第１３図　1d区出土遺物

ＳＫ－17（第 14 図）

位置　Ｃ－４　内容　遺構北側は、ＳＤ－13 により壊されており、元の遺構の形状は不明である。残存している軸径は 0.48m、深さは 0.07mである。ローム層を掘りこんでおり、壁は遺構外側に向かい緩やかに立ち上がっている。覆土は、暗黄褐色土、ロームブロックが少量混じる暗褐色土の単層である。自然堆積である。出土遺物は無い。

ＳＫ－18（第 14 図）

位置　Ｃ－４　内容　遺構北側は、ＳＤ－13 に壊されている。元の遺構の形状は不明である。残存している軸の径は 0.44m、深さは 0.12mである。ローム層を掘りこんでおり、壁は比較的急に立ち上がっている。覆土は、ローム粒子少量、ロームブロックをわずかに含む暗黄褐色土の単層である。自然堆積である。出土遺物は無い。

ＳＫ－19（第 14 図）

位置　Ｃ－４　内容　この遺構はＳＤ－13 を壊している。もとは不整円形だと考えられる。遺構の規模は径 0.5m、深さは 0.32mである。ローム層を掘りこんでおり、壁は急激に立ち上がっている。覆土は、柱痕と思われる１層目と、ロームブロック、ローム粒子を少量含む暗褐色土が２層に分層できる。出土遺物は無い。

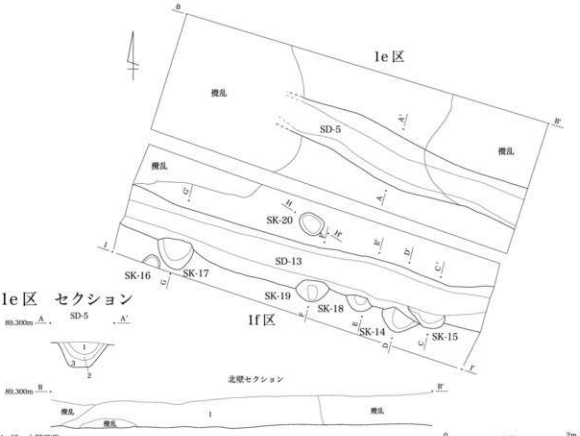
ＳＫ－20（第 14 図）

位置　Ｃ－４　内容　遺構の平面は、不整円形で、断面は皿状をなしている。長軸 0.38m、短軸 0.34m、深さ 0.06mで、ローム層を掘りこんでいる。覆土は、ロームブロックを少量含む黒褐色土の単層で、自然堆積である。出土遺物は無い。

（２）２区の遺構と遺物

ＳＸ－39（第 15・16・17 図、第８・９表）

位置　Ｃ－０・Ｃ－１・Ｄ－０・Ｄ－１　内容　遺構の北西隅を検出することができたが、遺構の南側および東側は、調査区の外にあり、規模は不明である。形状は方形もしくは長方形と考えられる。遺構確認面から遺構底面迄の深さは 1.15mを測り、現在の地表面から 2.23mある。底面はＫＰ層まで達している。遺構の範囲は、２ｂ区には達していない。覆土は１ｄ区のＳＸ－12 と似ており、遺構の外側から大量のロームブロックが混じる暗褐色土などで人為的に埋め戻されている。底面はほぼ水平と考えられる。ただし、ＳＸ－12 よりも深い遺構である。この地点は仮本陣の敷地内と考えられ、瓦の出土や『日光道中絵図』の記載から、仮本陣宅の蔵の地下室等の跡と考えられる。出土遺物は大変多く、近世から近代の陶磁器が主たるもので、瓦なども出土している。陶磁器片 32 点、瓦１点、煙管２点、寛永通宝２点、砥石を１点図示した。



1e区　土層説明

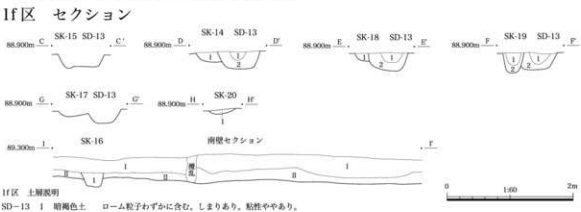
SD－5　1　暗褐色土　ローム粒子少量含む。しまりややあり。粘性ややあり。

　　2　暗黄褐色土　ローム粒子含む。しまりややあり。粘性ややあり。

　　3　暗黄褐色土　ロームブロック多く、ローム粒子含む。しまりややあり。粘性ややあり。

北壁セクション

　　1　暗褐色土　ローム粒子多く含む。しまりややあり。粘性ややあり。



1f区　土層説明

SD－13　1　暗褐色土　ローム粒子わずかに含む。しまりあり。粘性ややあり。

　　2　暗褐色土　ローム粒子含む。しまりあり。粘性ややあり。

SK－14　1　暗黄褐色土　ロームブロック少量、ローム粒子多く含む。しまりややあり。粘性ややあり。

SK－16　1　暗褐色土　ロームブロック少量　ローム粒子、暗黄褐色土少量含む。しまりややあり。粘性ややあり。

SK－18　1　暗黄褐色土　ロームブロックわずか、ローム粒子少量含む。しまりややあり。粘性ややあり。

SK－19　1　暗褐色土　ロームブロック少量、ローム粒子多く含む。しまりあり。粘性ややあり。

　　2　暗黄褐色土　ロームブロック、ローム粒子多量に含む。しまりややあり。粘性ややあり。

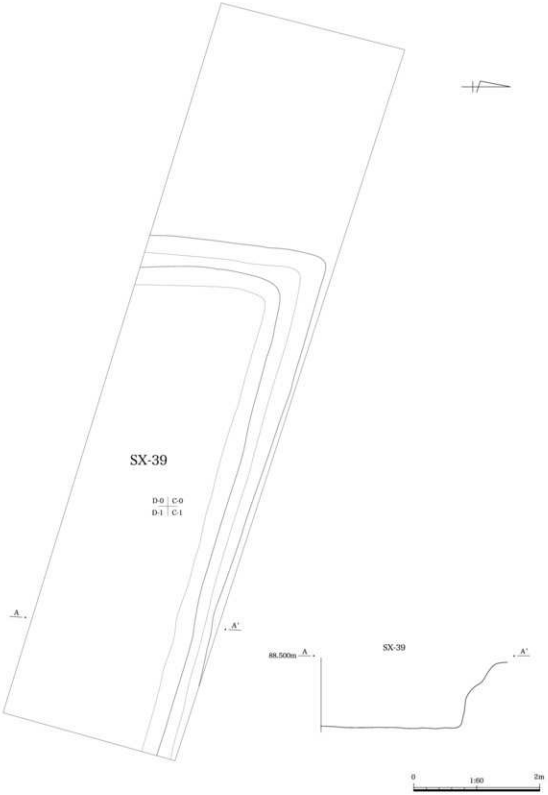
SK－20　1　黒褐色土　ロームブロック少量含む。しまりややあり。粘性ややあり。

南壁セクション

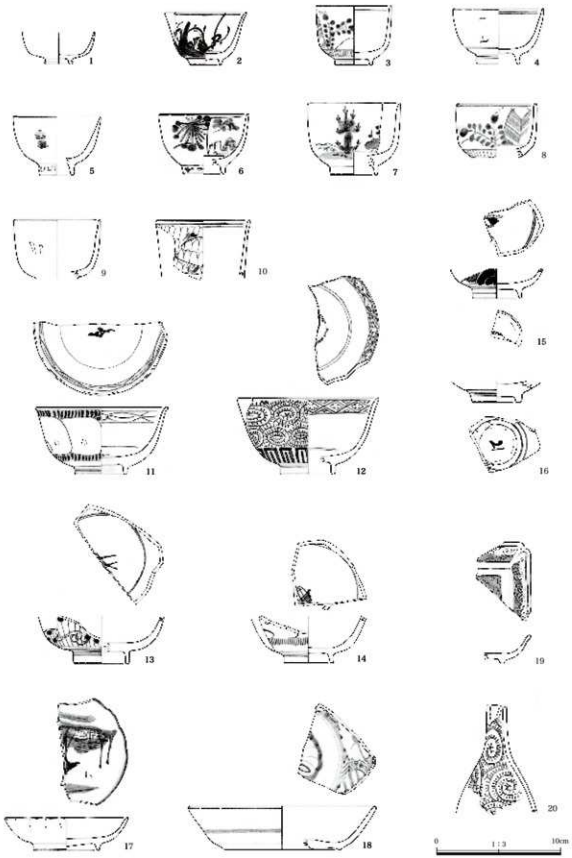
　　Ⅰ　暗褐色土　ロームブロック少量、ローム粒子少量、暗黄褐色土含む。しまりあり。粘性ややあり。

　　Ⅱ　暗黄褐色土　ロームブロック少量、ローム粒子、暗褐色土少量含む。しまりあり。粘性ややあり。

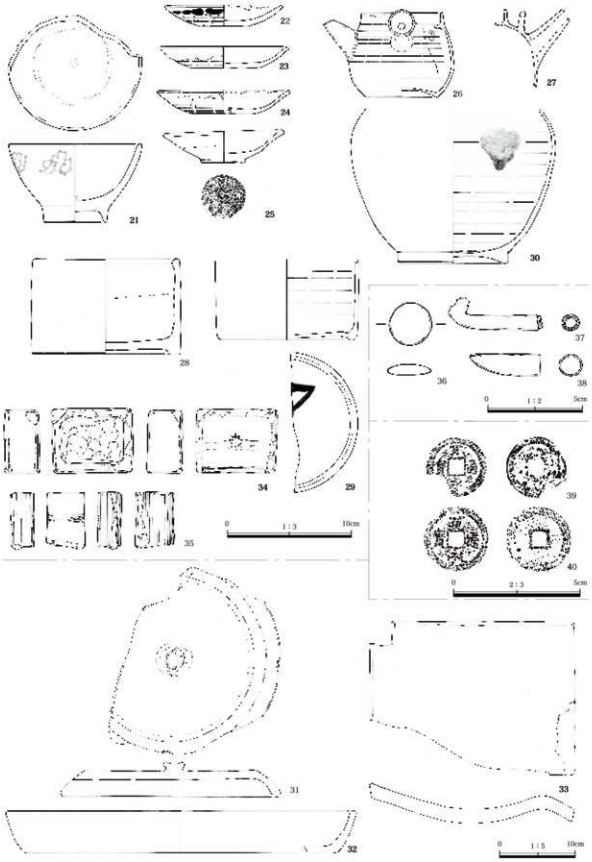
第14図　1e・f区遺構実測図



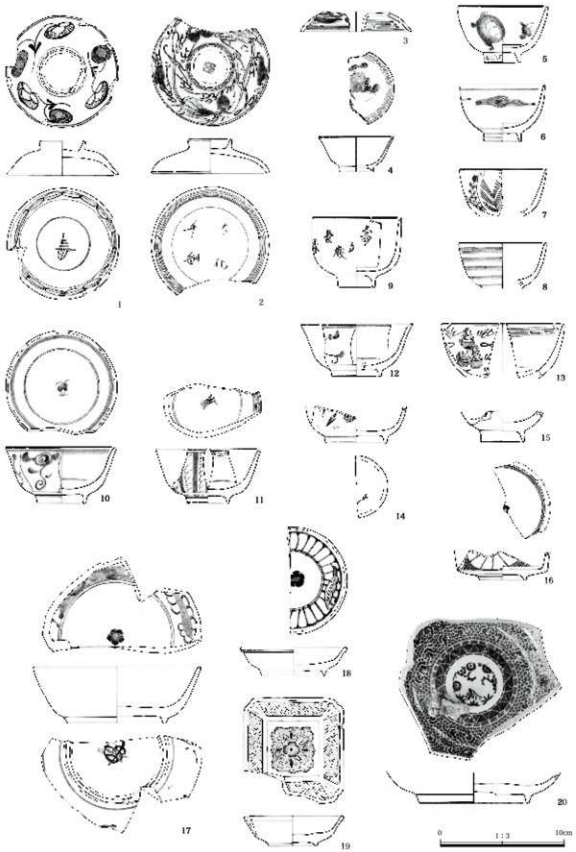
第 15 図　2a 区遺構実測図



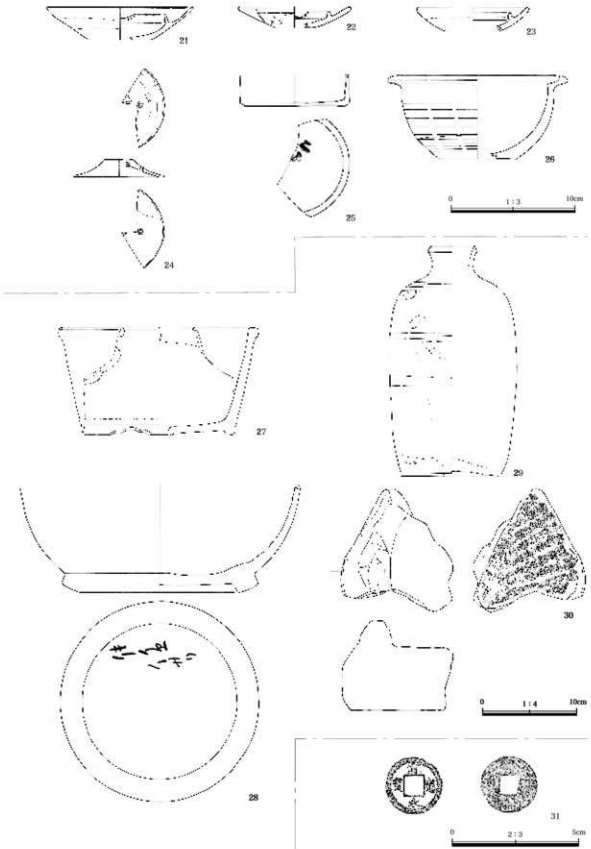
第16図　2a区SX-39出土遺物（1）



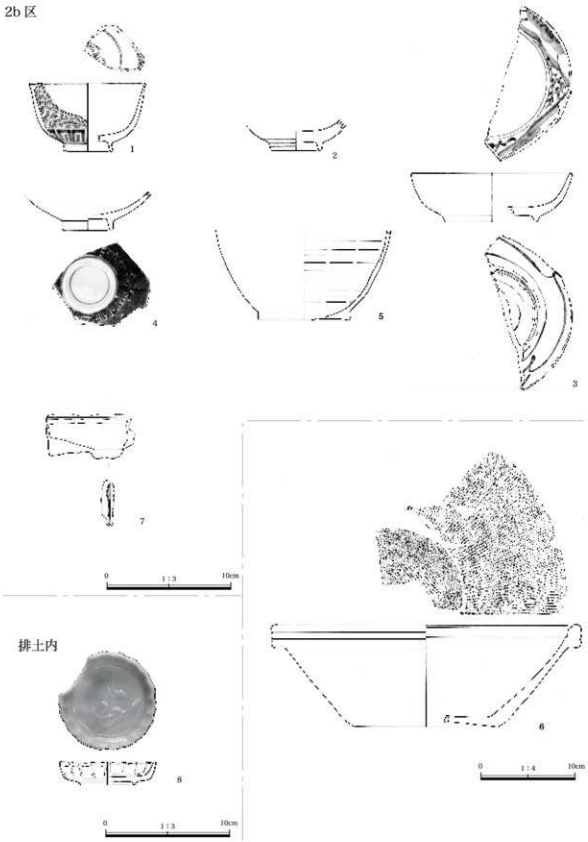
第17図　2a区 SX-39 出土遺物（2）



第18図　2a区出土遺物（1）



第19図　2a区出土遺物 (2)



第 20 図　2b 区・排土内出土遺物

（3）３区の遺構と遺物

ＳＤ－21（第 21 図）

位置　Ｊ－20　内容　遺構の北側は、調査区の外に伸びており、遺構の規模は不明である。ＳＤ－22 と重複しており、こちらの方が新しい。幅は 0.6m、深さは遺構確認面から 0.1mを測る。ローム層を掘りこんでおり、覆土はローム粒子を少量、ロームブロックが混じる暗褐色土の単層である。自然堆積である。出土遺物は無い。

ＳＤ－22（第 21・22・23・24・25 図、第 13 表）

位置　Ｊ－20・21　Ｋ－22・24・25　Ｌ－25　内容　遺構の西側および東側は調査区の外に伸びており、不明である。この溝は、３区から４ａ区をまたぎ検出している。規模は、広い場所で幅 1.12m、深い場所で 0.48mを測る。ローム層を掘りこんでおり、自然堆積である。覆土は、３ａ区で２層に分層が可能で、２層目上面が固く締まっている。このことから、この遺構は２時期使用され、最初にこの遺構の下端まで掘り進み、一度埋まったあと、次いで、２層目上面まで掘り直していることがわかる。４区では３層に分層され、３層の上面が固く締まっているので、２期目は２層まで掘り進めたことがわかる。覆土は、１層目はローム粒子が混じる暗褐色土で、２・３層は同じくロームブロックが混じる暗褐色土である。出土遺物は、４ａ区の地点から出土しており、土師器片９点、須恵器片８点が出土している。すべての遺物が小さい破片であり、図示できる遺物は少なく、須恵器片３点にとどまる。

ＳＫ－23（第 21 図）

位置　Ｊ－20　内容　ほぼ円形をなす小穴である。規模は径 0.25m、深さは 0.4mを測る。ローム層を掘りこみ、覆土は単層であり、ローム粒子を少量、ロームブロックをわずかに含む暗褐色土で、自然堆積である。出土遺物は無い。

ＳＫ－24（第 22 図）

位置　Ｉ－22　内容　不整円形をなす小穴である。長軸 0.22m、短軸 0.18m、深さ 0.21mを測る。ＳＤ－22 の底面を掘りこんでいる。ＳＤ－22 とこの遺構の新旧関係や、ＳＤ－22 に伴うものかは把握できなかった。覆土はローム粒子をわずかに含む暗褐色土で、自然堆積である。出土遺物はない。

ＳＫ－25（第 21 図）

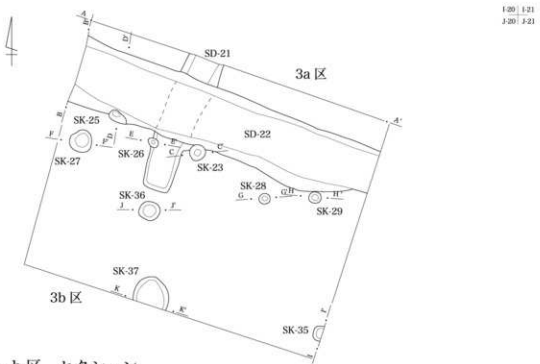
位置　Ｊ－20　内容　不整円形をなす小穴と考えられる。遺構の北側はＳＤ－22 に切られているため、遺構の全容を把握できない。残存している遺構の規模は 0.42m、深さ 0.08mである。ローム層を掘りこんでいる。覆土は単層であり、ローム粒子が混じる暗褐色土で、自然堆積である。出土遺物は無い。

ＳＫ－26（第 21 図）

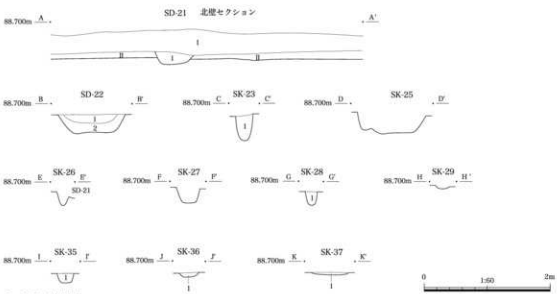
位置　Ｊ－20　内容　卵形をなす小穴である。遺構東側はＳＤ－21 重複しており、ＳＤ－21 を切っている。規模は長軸 0.16m、短軸 0.13m、深さは遺構確認面から 0.2mである。ローム層を掘り込んでおり、ローム粒子を多く含んでいる暗褐色土が覆土で単層であり、自然堆積である。出土遺物は無い。

ＳＫ－27（第 21 図）

位置　Ｊ－20　内容　不整円形をなす小穴である。規模は、長軸 0.46m、短軸 0.36m、深さ 0.21mである。ローム層を掘り込んでいる。覆土は単層で、ロームブロックを少量含む暗褐色土で、自然堆積である。出土



3a・b 区　セクション



3a・b 区　土層説明

SD－21　Ⅰ　暗褐色土　　ロームブロック、ローム粒子少量含む。しまりややあり。粘性ややあり。

SD－22　Ⅰ　黒褐色土　　ローム粒子少量含む。しまりあり。粘性ややあり。

　　2　暗褐色土　　ロームブロック少量、ローム粒子多く、暗黄褐色土含む。しまり強い。粘性ややあり。

SK－23　Ⅰ　暗褐色土　　ロームブロックわずか、ローム粒子少量含む。しまりややあり。粘性ややあり。

SK－28　Ⅰ　暗黄褐色土　ローム粒子多く含む。しまりあり。粘性ややあり。

SK－35　Ⅰ　暗褐色土　　ロームブロック少量含む。しまりややあり。粘性ややあり。

SK－36　Ⅰ　暗褐色土　　ローム粒子多く含む。しまりややあり。粘性ややあり。

SK－37　Ⅰ　暗褐色土　　ロームブロックわずか、ローム粒子少量含む。しまりややあり。粘性ややあり。

北壁セクション

　　Ⅰ　暗褐色土　　ローム粒子少量含む。しまりあり。粘性ややあり。

　　Ⅱ　暗黄褐色土　黄色土、暗褐色土含む。しまりあり。粘性ややあり。

第 21 図　3a・b 区遺構実測図

遺物は無い。

ＳＫ－28（第 21 図）

位置　Ｊ－20　内容　やや楕円をなす小穴である。規模は、長軸 0.18m、短軸 0.16m、深さ 0.2mを測る。ローム層を掘り込んでいる。覆土は単層で、ローム粒子を多く含む暗褐色土である。自然堆積である。出土遺物は無い。

ＳＫ－29（第 21 図）

位置　Ｊ－20　内容　楕円をなす小穴である。規模は、長軸 0.21m、短軸 0.18m、深さ 0.21mである。この遺構は、攪乱されている土を除去したのち確認した。当地区で発見された他の小穴よりも標高が低い地点で検出している。ＳＤ－22 の底面とほぼ同じ標高で、この遺構の上端を検出していることから、元は相当深かったと推測される。覆土は単層で、暗褐色土の自然堆積である。出土遺物は無い。

ＳＫ－30（第 23 図）

位置　Ｋ－22　内容　ほぼ正円をなす小穴である。規模は、径 0.3m、深さ 0.21mである。ローム層を掘り込んでいる。覆土は単層で、ローム粒子およびロームブロックを含む黒褐色土で、自然堆積である。出土遺物は無い。

ＳＫ－31（第 23 図）

位置　Ｊ－22・23　内容　遺構の大半が調査区外にあり、規模・形状ともに不明である。遺構の南西隅を確認したにとどまる。遺構確認面からの深さは 0.14mである。覆土は単層で、ローム粒子が少量、ロームブロックを含む暗褐色土である。自然堆積である。検出した遺構の平面形状から、方形の竪穴や土坑、古代の竪穴建物跡の可能性がある。出土遺物は無い。

ＳＫ－32（第 22 図）

位置　Ｊ－21　内容　平行四辺形をした小穴である。規模は、長軸 0.32m、短軸 0.21m、深さ 0.1mとごく浅いものである。ローム層を掘り込んでいる。覆土は単層で、ローム粒子を多く含む黒褐色土で、自然堆積である。出土遺物は無い。

ＳＫ－33（第 22 図）

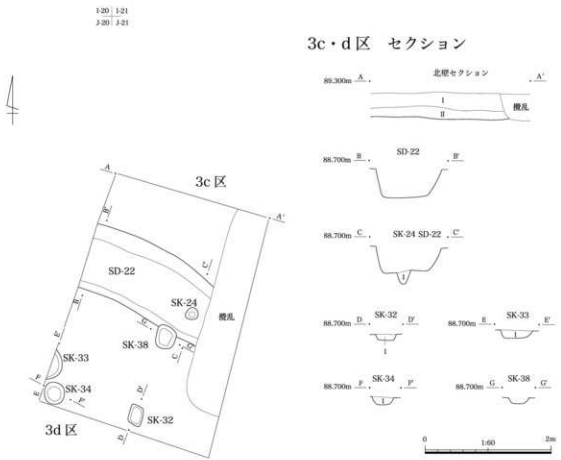
位置　Ｊ－20　内容　遺構の西側は、調査区の外におよんでおり、形状は不明である。確認できる規模で 0.46m、深さ 0.1mである。壁は遺構外側に開きながら立ち上がっている。ローム層を掘り込んでいる。覆土は単層で、ロームブロックを多く含む暗褐色土で、自然堆積である。出土遺物は無い。

ＳＫ－34（第 22 図）

位置　Ｊ－20　内容　楕円形の小穴である。規模は、長軸 0.35m、短軸 0.3m、深さ 0.13mを測る。ローム層を掘り込んでいる。壁は遺構外側に開く形で立ち上がっている。覆土は単層で、ローム粒子を多く含む暗褐色土で、自然堆積である。出土遺物は無い。

ＳＫ－35（第 21 図）

位置　Ｊ－20　内容　遺構の東側が調査区の外におよんでおり、形状、規模ともに把握できない。確認できたところでは 0.25m、深さ 0.14mを測る。ローム層を掘り込んでおり、覆土は単層で、ロームブロッ



3c・d 区　土層説明
SK－24　Ⅰ　暗褐色土　　ローム粒子わずかに含む。しまりなし。粘性ややあり。
SK－32　Ⅰ　黒褐色土　　ローム粒子多く含む。しまりややあり。粘性ややあり。
SK－33　Ⅰ　暗褐色土　　ロームブロック多く含む。しまりややあり。粘性ややあり。
SK－34　Ⅰ　暗褐色土　　ローム粒子多く含む。しまりややあり。粘性ややあり。
北壁セクション
　　Ⅰ　暗褐色土　　ローム粒子少量含む。しまりあり。粘性ややあり。
　　Ⅱ　暗黄褐色土　黄色土、暗褐色土含む。しまりあり。粘性ややあり。

第 22 図　3c・d 区遺構実測図

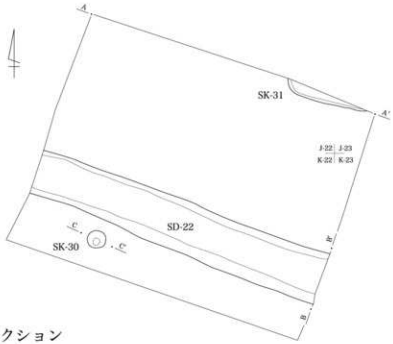
クを少量含む暗褐色土である。自然堆積である。出土遺物は、近世の磁器片１点出土しているが、小片のため、図示していない。

ＳＫ－36（第 21 図）

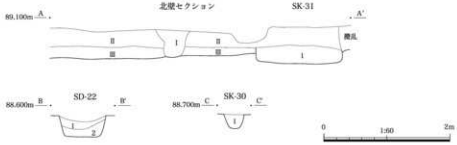
位置　Ｊ－20　内容　隅丸方形の小穴である。規模は、長軸 0.31m、短軸 0.3m、深さ 0.06mを測り、ごく浅い遺構である。ローム層を掘り込んでいる。覆土は単層で、ローム粒子を多く含む暗褐色土である。自然堆積である。出土遺物は無い。

ＳＫ－37（第 21 図）

位置　Ｊ－20　内容　遺構の南側は調査区の外にあり、完全に掘りきれなかった。確認できるところでの規模は0.57mあり、深さは0.03mで、ごく浅い遺構である。ローム層を掘り込んでいる。覆土は単層で、ロームブロックをわずかに含む暗褐色土で、自然堆積である。出土遺物は無い。



3e 区　セクション



3e 区　土層説明

SK－30	Ⅰ	黒褐色土	ロームブロック、ローム粒子含む。しまりややあり。粘性ややあり。
SK－31	Ⅰ	暗褐色土	ロームブロック、ローム粒子少量含む。しまりややあり。粘性ややあり。
SD－22	Ⅰ	暗褐色土	ロームブロック少量、ローム粒子多く含む。しまり強い。粘性ややあり。
	2	暗褐色土	ロームブロック、ローム粒子多量に含む。しまり強い。粘性ややあり。

北壁セクション

Ⅰ	暗褐色土	ローム粒子多く含む。しまりややあり。粘性ややあり。
Ⅱ	暗褐色土	ロームブロック微量、ローム粒子含む。しまりあり。粘性ややあり。
Ⅲ	暗黄褐色土	ロームブロック少量、暗褐色土含む。しまりあり。粘性ややあり。

第 23 図　3e 区遺構実測図

ＳＫ－38（第 22 図）

位置　Ｊ－21　内容　ＳＤ－22 と重複しており、この遺構の方が新しい。ただし、ＳＤ－22 に伴うものの可能性がある。遺構の形状は、ほぼ隅丸の長方形の小穴である。規模は長軸 0.35m、短軸 0.3m、深さ 0.36mを測る。ローム層を掘り込んでおり、壁は比較的急に立ち上がっている。覆土は単層で、暗褐色土で自然堆積であった。出土遺物は無い。

（４）４区の遺構と遺物

ＳＫ－40（第 24 図）

位置　Ｋ－24　内容　不整円形の小穴である。ＳＤ－22と重複しており、この遺構の方が新しい。ただし、ＳＤ－22 に伴う可能性もある。規模は、長軸 0.36m、短軸 0.25m、深さ 0.41mを測る。ローム層を掘り込んでいる。覆土は単層で、ローム粒子を多く、ロームブロック、ロームを少量含んでいる暗黄褐色土であり、自然堆積である。出土遺物は無い。

ＳＫ－41（第 24 図）

位置　Ｋ－24　内容　楕円形の小穴である。ＳＤ－22 と重複しており、この遺構の方が新しい。ただし、ＳＤ－22 に伴う遺構の可能性もある。規模は、長軸 0.45m、短軸 0.36m、深さ 0.26mを測る。ローム層を掘り込んでいる。覆土は単層で、ローム粒子少量、ロームブロック少量、暗黄褐色土少量を含む暗褐色土で、自然堆積である。出土遺物は無い。

ＳＫ－42（第 24 図）

位置　Ｋ－24・25　Ｌ－24・25　内容　隅丸長方形の小穴である。規模は、長軸 0.4m、短軸 0.35m、深さ 0.12mを測る。ローム層を掘り込んでいる。壁は遺構南側が外側に向かって開いて立ち上がっている。覆土は単層で、ローム粒子、ロームブロックをわずかに含む暗褐色土で、自然堆積である。出土遺物は無い。

ＳＫ－43（第 24 図）

位置　Ｋ－25　内容　ＳＤ－22 と重複しており、この遺構の方が古い。そのため、遺構の南側の形状等は不明である。残存している軸は 0.6m、深さ 0.12mを測る。ローム層を掘り抜いている。壁は遺構外側に向かって緩やかに開きながら立ち上がっている。覆土は単層で、ローム粒子をやや含み、ロームブロックがわずかに混じる暗褐色土で、自然堆積である。出土遺物は無い。

ＳＫ－44（第 24 図）

位置　Ｋ－25　内容　不整円形の土坑である。規模は、長軸0.75m、短軸0.55m、深さ0.18mを測る。ローム層を掘り込んでいる。壁は遺構外側に向かって開きながら緩やかに立ち上がる。覆土は単層で、ローム粒子が多く、ロームブロックを少量含む暗褐色土で、自然堆積である。出土遺物は無い。

ＳＫ－45（第 24 図）

位置　Ｋ－25　内容　ＳＤ－22、ＳＸ－49と重複しており、両者ともにこの遺構よりも新しい。そのため、この遺構の北側および東側については、規模、形状ともに不明である。深さは 0.12mを測る。ローム層を掘り込んでおり、覆土は単層で、暗黄褐色土が少量、ローム粒子を含む暗褐色土で、自然堆積である。出土遺物は無い。

ＳＤ－46（第 24・25 図・第 13 表）

位置　Ｋ－25　内容　ＳＤ－22、ＳＫ－47、ＳＫ－48 と重複している。遺構確認の際、ＳＫ－47 とＳＫ－48 のプランを確認できたので、ＳＫ－47 およびＳＫ－48 の方が新しい。さらに遺構確認の際、この遺構がＳＤ－22に壊されていたので、この遺構の方が古いことになる。遺構の南側は、ＳＤ－22に切られており、ＳＤ－22 の南側にＳＤ－46 の続きがみられないことから、ＳＤ－22 の中で収束しているものと考えられる。遺構の北側は、攪乱があり、その北側は調査区の外になり、規模などは不明である。溝の幅は 0.66m、

深さは 0.17mを測る。ローム層を掘り込んでいる。覆土は単層で、暗黄褐色土、ローム粒子ともに少量含んでいる暗褐色土で、自然堆積である。出土遺物は、９世紀中頃の須恵器の坏の破片が１点出土しており、図示した。

ＳＫ－47（第 24 図）

位置　Ｋ－25　内容　ＳＤ－46 と重複している。遺構確認の際、この遺構のプランを確認できたことから、こちらが新しい。不整円形の小穴である。規模は、長軸 0.25m、短軸 0.21m、深さは 0.32mを測る。ローム層を掘り込んでいる。壁は急激に立ち上がっている。覆土は単層で、ローム粒子が多く、ロームブロックがまじる暗褐色土で、自然堆積である。出土遺物は、土師器片１点あるが、小片のため図示はしていない。

ＳＫ－48（第 24 図）

位置　Ｋ－25　内容　ＳＤ－46 と重複している。遺構確認の際、この遺構のプランを確認できたことから、こちらの方が新しい。不整円形の小穴である。規模は長軸で 0.3m、短軸で 0.2m、深さ 0.18mを測る。ローム層を掘り込んでいる。壁は急激に立ち上がっている。覆土はロームブロック、ローム粒子を含む暗褐色土の単層で自然堆積している。出土遺物は無い。

ＳＸ－49（第 24 図）

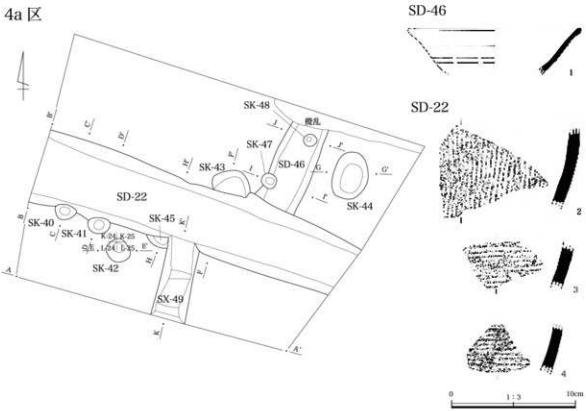
位置　Ｌ－25　内容　ＳＤ－22 とＳＫ－45 と重複している。遺構確認の際、両方の遺構を切っていることから、この遺構が一番新しい。底面は南側へ向かって、階段状に下がっており、さらに南側の調査区外へ続いている。遺構の北側は、ＳＤ－22 を先に掘ってしまったため、よくわからなかった。幅は 0.5m、深さは調査区都の境で 0.74mを測る。覆土は、多量にロームブロックを含む、締まりのない暗褐色土で、人為的に埋め戻されたものである。底面の形状や幅からすると、何かへ続く通路のような施設だと考えられる。出土遺物は無い。

ＳＫ－50（第 26 図）

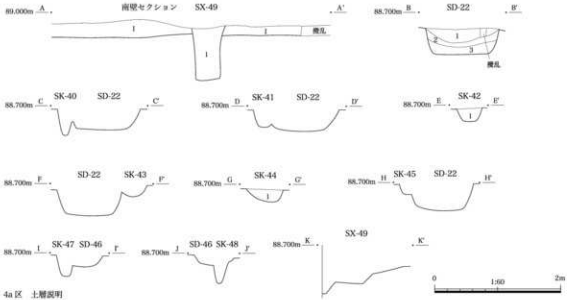
位置　Ｌ－26　内容　遺構東側は、調査区の外におよんでおり、把握できなかった。遺構の検出状況からすると、方形の竪穴になりそうである。底面にピットを２基伴っている。確認できる規模は南北 1.8m、深さ 0.2mである。北側のピットの深さは、遺構底面から 0.48m。南側のピットは 0.3mである。覆土は単層で、白色粒子、ローム粒子、ロームブロックがともに少量混じっている暗褐色土で、自然堆積である。北側のピットの覆土は単層で、ロームブロックが少量、赤色粒子が多く、黒褐色土が少量混じっている暗褐色土である。南側のピットは単層で、ローム粒子少量、ロームブロックを含む暗褐色土である。いずれも自然堆積である。出土遺物は土師器片・須恵器片それぞれ１点出土しているが、小片のため図示はしていない。

ＳＫ－51（第 26 図）

位置　Ｌ－26　内容　遺構東側は、調査区の外になってしまい、把握できなかった。規模は南北 0.33m、深さは 0.2mの小穴である。ローム層を掘り込んでおり、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は、ロームブロックが多量に含んでいる黒褐色土で、自然堆積である。出土遺物は無い。



第 25 図　4a 区 SD-22･SD-46 出土遺物



4a 区　土層説明

SD－22　1　暗褐色土　ローム粒子含む。しまりややあり。粘性ややあり。
　　2　暗褐色土　ロームブロック少量、ローム粒子多く、黒褐色土少量含む。しまりややあり。粘性ややあり。
　　3　暗褐色土　ロームブロック多量、ローム粒子含む。しまり強い。粘性ややあり。
SK－42　1　暗褐色土　ロームブロックわずか、ローム粒子含む。しまりややあり。粘性ややあり。
SK－44　1　暗褐色土　ロームブロックわずか、ローム粒子多く含む。しまりややあり。粘性ややあり。
SX－49　1　暗褐色土　ロームブロック多量に含む。しまりなし。粘性ややあり。
南壁セクション
　　I　暗褐色土　暗黄褐色土やや含む。しまりややあり。粘性ややあり。

第 24 図　4a 区遺構実測図

ＳＫ－52（第 26 図）

位置　Ｍ－26　内容　楕円形の土坑である。規模は、長軸 0.45m、短軸 0.36m、深さ 0.4mを測る。ローム層を掘り込んでおり、壁は緩やかに遺構外側に向かって開きながら立ち上がっている。覆土は単層で、暗黄褐色土少量、ローム粒子少量、ロームブロックを含む黒褐色土で、自然堆積である。出土遺物は無い。

ＳＫ－53（第 26 図）

位置　Ｍ－26　内容　遺構の東側は調査区の外におよんでおり、把握できなかった。南北で 0.37m、深さは 0.13mで、ごく浅い小穴である。ローム層を掘り込んでおり、壁は遺構外側に向かって開くように緩やかに立ち上がっている。覆土は単層で、ローム粒子、ロームブロックわずかに含む暗褐色土で、自然堆積である。出土遺物は無い。

ＳＫ－54（第 26 図）

位置　Ｌ－25　内容　遺構の北西は、ＳＫ－55 によって切られている。楕円形の土坑である。規模は長軸 0.77m、短軸 0.65m、深さ 0.1mを測る。ローム層を掘り込んでおり、壁は緩やかに遺構外側に向かって開くように立ち上がっている。覆土は単層で、暗黄褐色土少量、ロームブロック少量含む暗褐色土で、自然堆積である。出土遺物は、古代の甕の底部が１点出土しているが、小片のため図示はしていない。

ＳＫ－55（第 26 図）

位置　Ｌ－25　内容　遺構の南東側はＳＫ－54 を壊している。不整円形の小穴である。規模は長軸 0.45m、短軸は 0.35m、深さ 0.35mを測る。遺構北側は深さ 0.15mで平坦部があり、そこから比較的急に下がっている。ローム層を掘り込んでいる。覆土は単層で、ローム粒子が多く、ロームブロック少量混じる暗褐色土で、自然堆積である。出土遺物は無い。

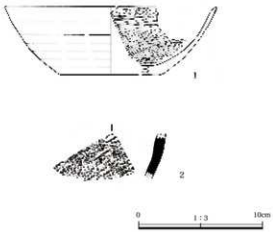
（5）　遺構外出土遺物（第７・８・13・18・20・27 図、第３・７・10・11・12・14 表）

古代の遺物では、４ｂ区で内面を黒色処理している土師器片が何点か出土し、それらを接合できたため図示した（第 27 図１）。9 世紀後半ごろの遺物である。同地区から土師器と同時期の須恵器が出土している。それ以外は、近世から近代にかけて作られた陶磁器が主である。調査区内には多くの攪乱を受けた場所があり、そこからも多くの陶磁器が出土した。今回の報告では、古代の遺物以外は主に近世及び近代初頭に属すると考えられる陶磁器等を図示した。

第 13 図は１ｄ区からの出土遺物で、SX－12 の周辺で出土した遺物である。そのため、当遺構に伴う遺物である可能性が高い。さらにいえば、SX－12 の遺構の家主の持ち物であろう。つまり、１区から出土した遺物は、ＳＸ－12 を作った人の持ち物であったと推察される。

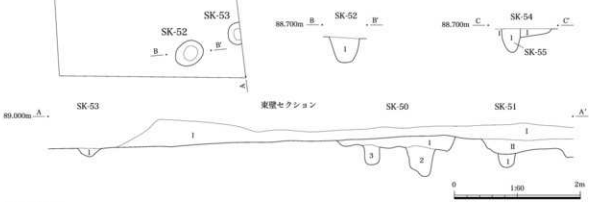
また、第 18・19 図の２ａ区の遺物もＳＸ－39 の周辺からの出土であることから、ＳＸ－39 に伴うものと考えられる。２ａ区から出土した遺物は、ＳＸ－39 を作った人の持ち物であったと考えられる。１区の遺構外に遺物と同様に、２区から出土した遺物は、敷地内にＳＸ－39 があった家の物であったと思われる（後述するが、１区と２区は異なった家の敷地である）。

ちなみに、第19図29は、重機により表土除去している途中で発見された遺物である。第19図30の石臼は、表採した遺物である。



第 27 図　4b 区出土遺物

4b 区　セクション



4b 区　土層説明

SK－50　1　暗褐色土　白色粒子少量、ロームブロック少量、ローム粒子少量含む。しまりややあり。粘性ややあり。
　　2　暗褐色土　ロームブロックわずか、ローム粒子多く、黒褐色土少量含む。しまりややあり。粘性ややあり。
　　3　暗黄褐色土　ロームブロック、ローム粒子少量含む。しまりあり。粘性ややあり。
SK－51　1　黒褐色土　ロームブロック多量に含む。しまりややあり。粘性ややあり。
SK－52　1　黒褐色土　ロームブロック少量、ローム粒子少量、暗黄褐色土少量含む。しまりややあり。粘性ややあり。
SK－53　1　暗褐色土　ロームブロックわずか、ローム粒子含む。しまりややあり。粘性ややあり。
SK－54　1　暗褐色土　ロームブロック少量、暗黄褐色土少量含む。しまりややあり。粘性ややあり。
SK－55　1　暗褐色土　ロームブロック少量、ローム粒子多く含む。しまりややあり。粘性ややあり。
東壁セクション
　　I　暗褐色土　暗黄褐色土少量含む。しまりあり。粘性ややあり。
　　II　暗黄褐色土　ローム粒子少量含む。しまりあり。粘性ややあり。

第 26 図　4b 区遺構実測図

第２表　１ａ区出土遺物観察表

（　）は推定値、［　］は残存値

図版番号	NO.	出土場所	種類器種	法量(cm)	色調	色 胎土	文様 外面	文様 内面	文様 見込み	文様 底面	特徴	推定産地	推定年代	備考
7	1	1ａ区 SK-1	磁器 筒碗	口径：7.4) 底径：— 器高：4.8)	外）呉須 内外）透明釉	灰色 緻密	コンニャク判				手描き	瀬戸・美濃系	江戸時代 後期	
7	2	1ａ区 SK-1	陶器 おろし皿	口径：13.0) 底径：7.2) 器高：3.3	外）灰釉	灰色 密					外面　施釉	瀬戸・美濃系	中世？	底部回転糸切り。
7	3	1ａ区 SK-1	鉄製品 ヤス	長さ：[16.5] 幅　：[4.0] 重量：78.5g										
7	4	1ａ区 SK-3	陶器 小皿	口径：7.0) 底径：3.8) 器高：2.2	外）灰釉	淺黄 密					外面　施釉	瀬戸・美濃系？	中世？	
7	5	1ａ区	磁器 端反形 小碗	口径：8.8) 底径：2.8) 器高：4.3	内）透明釉 外）青磁釉	白ガラス質 緻密				角紀弓	二彩	瀬戸・美濃系	近代 (明治初期)	
7	6	1ａ区	磁器 碗形	口径：— 底径：[5.2] 器高：[7.2]	外）呉須；透明釉	灰色 緻密				無銘	手描き 山水文	瀬戸・美濃系	江戸時代 後期 (1800～)	

第３表　１ｂ区出土遺物観察表

（　）は推定値、［　］は残存値

図版番号	NO.	出土場所	種類器種	法量(cm)	色調	色 胎土	文様 外面	文様 内面	文様 見込み	文様 底面	特徴	推定産地	推定年代	備考
8	1	1ｂ区	磁器 半筒形 小碗	口径：8.6) 底径：— 器高：3.0)	内外）呉須；透明釉	灰白 緻密	平菊花文 ひし文	四方雁文			手描き	肥前系	江戸時代 中期	

第４表　１ｃ区出土遺物観察表

（　）は推定値、［　］は残存値

図版番号	NO.	出土場所	種類器種	法量(cm)	色調	色 胎土	文様 外面	文様 内面	文様 見込み	文様 底面	特徴	推定産地	推定年代	備考
10	1	1ｃ区 表面 撹乱	磁器 半筒形 小碗	口径：— 底径：— 器高：[3.9]	内外）呉須；透明釉	灰色 緻密	平菊花文 ひし文				手描き	肥前系	江戸時代 中期 (1750～1810)	
10	2	1ｃ区 表面 撹乱	磁器 中碗	口径：— 底径：(5.0) 器高：[3.6]	内）透明釉 外）コバルト；透明釉	白ガラス質 緻密					手描き	瀬戸・美濃系	近代	
10	3	1ｃ区	磁器 皿	口径：[13.4] 底径：(6.8) 器高：2.8	内外）コバルト；透明釉	白ガラス質 緻密	鳳凰文	鳳凰唐草文	雷紋松竹梅文		型紙摺 蛇の目高台 蛇の目釉ハギ	瀬戸・美濃系	近代	
10	4	1ｃ区 撹乱	磁器 鉢	口径：15.8 底径：— 器高：[5.2]	内外）コバルト；透明釉	白ガラス質 緻密	鳳凰唐草文 菊花文	鳳凰唐草文 花文			銅版転写	瀬戸・美濃系	近代	
10	5	1ｃ区	陶器 灯明受皿	口径：[12.0] 底径：— 器高：[1.6]	内）暗赤褐色～灰 外）黒褐色～灰	灰色 緻密					瓦質	瀬戸・美濃系？	江戸時代 後期？	

第５表　１ｄ区 SK- ６出土遺物観察表

（　）は推定値、［　］は残存値

図版番号	NO.	出土場所	種類器種	法量(cm)	色調	色 胎土	文様 外面	文様 内面	文様 見込み	文様 底面	特徴	推定産地	推定年代	備考
11	1	1ｄ区 SK-6	磁器 輪花皿 小皿	口径：(9.0) 底径：— 器高：[1.3]	内外）呉須；透明釉	白色 緻密	唐草文	鳳凰唐草文			手描き	瀬戸・美濃系	江戸時代 後期	
11	2	1ｄ区 SK-6	磁器 仏花瓶	口径：7.8 底径：4.5 器高：12.2	内外）コバルト；透明釉	白ガラス質 緻密						瀬戸・美濃系		

第６表　１ｄ区 SX-12 出土遺物観察表

（　）は推定値、［　］は残存値

図版番号	NO.	出土場所	種類器種	法量(cm)	色調	色 胎土	文様 外面	文様 内面	文様 見込み	文様 底面	特徴	推定産地	推定年代	備考
11	3	1ｄ区 SX-12	磁器 筒丸形 小碗	口径：(7.0) 底径：— 器高：[4.5]	内外）呉須；透明釉	灰色 緻密	風景文				手描き	肥前系	江戸時代 中～後期	
11	4	1ｄ区 SX-12	磁器 小碗	口径：— 底径：(3.2) 器高：[3.1]	内外）呉須；透明釉	灰白 緻密		一重菱輪			手描き	瀬戸・美濃系	江戸時代 後期	

11	5	1d区 SX-12	磁器 端反形 中皿	口径：(9.6) 底径：— 器高：[3.3]	内外） 呉須、透明釉	白色 緻密	八弁文	二重圏線			手描き	瀬戸・美濃系	江戸時代 後期	
11	6	1d区 SX-12	磁器 中皿	口径：(10.0) 底径：— 器高：[3.6]	内外） 呉須、透明釉	灰白 緻密	素描唐草文	雷文			手描き	肥前系	江戸時代 中～後期	第14図1とセットか。
11	7	1d区 SX-12	磁器 椀	口径：(9.6) 底径：— 器高：[4.4]	内外） 呉須、透明釉	灰色 緻密	雲龍に山水文	雷文			手描き	肥前系	江戸時代 後期	
11	8	1d区 SX-12	磁器 丸形 中皿	口径：(9.4) 底径：4.0 器高：5.8	内外） 呉須、透明釉	灰色 緻密	松葉文		「福」		手描き	肥前系	江戸時代 中～後期	
11	9	1d区 SX-12	磁器 椀	口径：— 底径：3.9 器高：[3.0]	内外） 呉須、透明釉	灰白 緻密			岩松文		手描き	肥前系	江戸時代 後期	
11	10	1d区 SX-12	磁器 皿	口径：— 底径：5.8 器高：[1.7]	内外） 呉須、透明釉	灰白 緻密	山水文		二重圏線 十字花文		手描き	肥前系	江戸時代 中～後期	
11	11	1d区 SX-12	磁器 広東形 中皿	口径：— 底径：(6.0) 器高：[4.0]	内外） 呉須、透明釉	灰白 緻密					手描き	肥前系	江戸時代 中期	
11	12	1d区 SX-12	磁器 端反形 小鉢	口径：(6.0) 底径：(2.8) 器高：4.2	内）透明釉 外）コバルト、 透明釉	白ガラス質 緻密	文字文			高台内に文字	手描き	瀬戸・美濃系	近代～	
11	13	1d区 SX-12	磁器 皿	口径：(16.0) 底径：— 器高：[4.5]	内）呉須：透 明釉 外）透明釉	灰色 緻密					手描き	肥前系	江戸時代 後期	
11	14	1d区 SX-12	磁器 皿	口径：— 底径：(7.8) 器高：[2.5]	内）呉須：透 明釉 外）透明釉	灰白 緻密				高台内中心部 外は無釉（輪 ハギ）	手描き 蛇の目高台	肥前系	江戸時代 後期	
11	15	1d区 SX-12	磁器 徳利	口径：(3.0) 底径：— 器高：[16.7]	内）透明釉 外）呉須：透 明釉	灰色 緻密	雷文 山水文				手描き	瀬戸・美濃系	江戸時代 中～後期	
11	16	1d区 SX-12	磁器 土瓶	口径：7.2 底径：7.0 器高：7.6	内）コバルト、 透明釉	白色 緻密	草花文				手描き	瀬戸・美濃系	近代	
12	17	1d区 SX-12	陶器 灯明皿？	口径：(10.1) 底径：(3.8) 器高：2.3	内）鉄釉 外）上部鉄釉	橙色 密				無釉				外面に線にタール付着。 底部糸きり。
12	18	1d区 SX-12	陶器 灯明皿	口径：(10.0) 底径：— 器高：[1.9]	内外）鉄釉	灰色 密				無釉		瀬戸・美濃系	江戸時代 後期	
12	19	1d区 SX-12	陶器 鉢	口径：(18.0) 底径：(12.0) 器高：[5.9]	内外）白泥 に側部にコバ ルト染付 透明釉	浅黄 密				無釉	蛇の目高台 陶胎染付	瀬戸・美濃系	近代	
12	20	1d区 SX-12	陶器 甕？	口径：— 底径：9.6 器高：[5.5]	内外）鉄釉	灰白 密				無釉		瀬戸・美濃系	江戸時代 後期	底部墨書あり。
12	21	1d区 SX-12	陶器	口径：— 底径：9.4 器高：[2.6]	内）浅黄 外）透明釉	灰色 緻密						瀬戸・美濃系		底部墨書あり。
12	22	1d区 SX-12	陶器 鉢	口径：— 底径：14.0 器高：[12.0]	内外）灰釉	灰白 密				無釉	蛇の目高台	瀬戸・美濃系	近代	底部墨書あり。
12	23	1d区 SX-12	陶器 擂鉢	口径：(15.0) 底径：— 器高：[4.6]	内）鉄釉 外（一部～外） 無釉	灰色 緻密						瀬戸・美濃系	近代？	
12	24	1d区 SX-12	陶器 擂鉢	口径：— 底径：(7.4) 器高：[2.2]	内外）鉄釉	橙色 密				無釉	体部～底部 輪ハギ	蛇の目高台		第13図17と同一の底部か。 底部墨書あり。
12	25	1d区 SX-12	陶器 擂鉢	口径：— 底径：(13.0) 器高：[2.8]	内外）鉄釉	灰色 密			回転糸切			瀬戸・美濃系		
12	26	1d区 SX-12	陶器 擂鉢	口径：— 底径：(17.0) 器高：[8.5]	内外）黒褐色	にぶい橙 長石 密					施釉なし 瓦質			併系か？
12	27	1d区 SX-12	陶器 擂鉢	口径：(35.6) 底径：(17.4) 器高：14.0	内外）鉄釉	灰色 密				無釉	26本一単位	瀬戸・美濃系	近代	

第７表　１ｄ区出土遺物観察表

（　）は推定値、〔　〕は残存値

図版番号	NO	出土場所	種類 器種	法量 (cm)	色調	色 胎土	文様 外面	文様 内面	文様 見込み	文様 底面	特徴	推定産地	推定年代	備考
13	1	1d区	磁器 蓋	残存：4.0 底径：9.6 器高：2.9	内外） 呉須：透明釉		素福唐花文	蕨文	環状松竹梅文		手描き	肥前系	江戸時代後期	第12図６とセットか。
13	2	1d区	磁器 蓋	残存：(3.0) 底径：9.0 器高：3.0	内外） 呉須：透明釉	灰白 緻密	蛸唐草文	四方爆文	環状松竹梅文「成□年□」		手描き	瀬戸・美濃系	江戸時代後期	「成化年制」とあるか。
13	3	1d区	磁器 蓋	口径：— 底径：(9.6) 器高：(1.8)	内外） 呉須：透明釉	灰白 緻密	素福唐花文	蕨文			手描き	肥前系	江戸時代後期	
13	4	1d区	磁器 蓋	残存：(4.0) 底径：4.0 器高：2.3	内外） コバルト：透明釉	白ガラス質 緻密	松竹梅文 鳳凰　花文	雷文			型紙摺	瀬戸・美濃系	近代	
13	5	1d区	磁器 筒丸形小碗	口径：6.4 底径：3.8 器高：5.0	内外） 呉須：透明釉		草花文			角福	手描き	瀬戸・美濃系	江戸時代後期	
13	6	1d区	磁器 筒碗	口径：(7.0) 底径：— 器高：(6.5)	内外） 透明釉；染付	灰白 緻密	人物	松文		「大明成□□」		瀬戸・美濃系	近代 (19c後半)	底部に「大明成化年制」とあるか。
13	7	1d区	磁器 端反形小碗	口径：(8.0) 底径：(3.6) 器高：4.1	内外）透明釉 外）コバルト	白ガラス質 緻密	唐草文			「□盛□□」	銅版転写	瀬戸・美濃系	近代 (1900～?)	
13	8	1d区	磁器 段重	口径：(9.6) 底径：(8.4) 器高：2.1	内外）透明釉 外）呉須	白色 緻密	松竹梅文				手描き	瀬戸・美濃系	近代	
13	9	1d区	磁器 皿	口径：(10.6) 底径：(6.0) 器高：2.0	内外）コバルト：透明釉	白ガラス質 緻密	蕨文？	雲龍唐草文 籠子 蕨花？			型紙摺	瀬戸・美濃系	近代	
13	10	1d区	磁器 輪花形皿	口径：(17.0) 底径：— 器高：(2.4)	内外） 呉須：透明釉	白色 緻密	唐草文	形縁文 山水文？			手描き	瀬戸・美濃系	江戸時代末	
13	11	1d区	磁器 輪花皿	口径：15.0 底径：9.0 器高：4.4	内）呉須 内外）透明釉	灰色 緻密	口紅　草文				手描き 高台縁紅 絵の日高台	肥前系	江戸時代後期	
13	12	1d区	磁器 皿	口径：— 底径：(9.0) 器高：(2.6)	内）呉須 内外）透明釉	灰白 緻密					手描き 見込みに松の日和ハボ	肥前系	江戸時代中期	
13	13	1d区	磁器 大皿	口径：— 底径：(18.0) 器高：(2.1)	内）呉須 内外）透明釉	灰白 緻密		山水文			手描き	肥前系	江戸時代中～後期	接継あり。
13	14	1d区	磁器 急須	口径：(8.6) 底径：— 器高：(5.9)	内外） コバルト：透明釉	白色 緻密	草花文				手描き	瀬戸・美濃系	近代	
13	15	1d区	磁器 鉢	口径：(9.0) 底径：— 器高：(6.9)	内外）透明釉 外）コバルト	白色 緻密	蕨唐文 蕨叶文				手描き	瀬戸・美濃系	近代	

第８表　２ａ区 SX-39 出土遺物観察表 (1)

（　）は推定値、〔　〕は残存値

図版番号	NO	出土場所	種類 器種	法量 (cm)	色調	色 胎土	文様 外面	文様 内面	文様 見込み	文様 底面	特徴	推定産地	推定年代	備考
16	1	2a区 SX-39	磁器 碗	口径：5.9 底径：2.3 器高：2.7	内外）透明釉	白色 緻密						瀬戸・美濃系	江戸時代後期	
16	2	2a区 SX-39	磁器 端反形小碗	口径：7.6 底径：2.6 器高：4.3	内外）透明釉 外）コバルト	白色 緻密	草花文				手描き	瀬戸・美濃系	近代	
16	3	2a区 SX-39	磁器 筒丸形小碗	口径：(6.0) 底径：(3.0) 器高：4.8	内外）呉須；透明釉	灰白 緻密	蕨・蕨・草葉？ 蕨叶文	二重圏線			手描き	肥前系	江戸時代中～後期	
16	4	2a区 SX-39	磁器 小碗	口径：(7.2) 底径：(3.4) 器高：4.5	内外）呉須；透明釉	灰白 緻密	文字文	二重圏線			手描き	肥前系	江戸時代中～後期	

16	6	2a区 SX-39	磁器 小椀	口径：(7.2) 底径：(3.1) 器高：4.8	内外）透明釉	灰白 緻密	鉄釉に山水文 花文				手描き	肥前系	江戸時代 中～後期	
16	7	2a区 SX-39	磁器 小椀	口径：(7.4) 底径：(3.8) 器高：5.8	内外） 呉須；透明釉	灰白 緻密	松文				手描き	肥前系	江戸時代 前期	
16	8	2a区 SX-39	磁器 小椀	口径：(6.5) 底径：— 器高：(4.4)	内外）透明釉 外）呉須	灰白 緻密	蘭・羊歯？ 雀弁文				手描き	肥前系	江戸時代 中～後期	
16	9	2a区 SX-39	磁器 小椀	口径：(7.0) 底径：— 器高：(4.8)	内外）透明釉	灰白 緻密	？文				手描き	肥前系？	江戸時代 中～後期	
16	10	2a区 SX-39	磁器 筒形 小椀	口径：(7.5) 底径：— 器高：(4.7)	内外） 呉須；透明釉	灰白 緻密	鳥獣唐草文				手描き	肥前系	江戸時代 中～後期	
16	11	2a区 SX-39	磁器 端反形 中椀	口径：(10.6) 底径：(4.2) 器高：5.5	内外） 呉須；長石 釉？	灰白 緻密	蔦蘭 唐草文	葉葉文	花文		手描き	肥前系	江戸時代 中～後期	貫入あり。
16	12	2a区 SX-39	磁器 端反形 中椀	口径：(11.2) 底径：(4.4) 器高：6.2	内外） 呉須；透明釉	灰白 緻密	蛸唐草文 雀弁文	四方襷文	環状松竹梅文		手描き	瀬戸・美濃系	江戸時代 後期	
16	13	2a区 SX-39	磁器 中椀	口径：— 底径：(4.6) 器高：3.8	内外） 呉須；透明釉	灰白 緻密	唐草文？		文様あり		手描き	肥前系？	江戸時代 中～後期	貫入あり。
16	14	2a区 SX-39	磁器 中椀	口径：— 底径：(4.0) 器高：3.8	内外） 呉須；透明釉	灰白 緻密	蛸蘭		寿文		手描き	肥前系	江戸時代 中～後期	
16	15	2a区 SX-39	磁器 中椀	口径：— 底径：(4.0) 器高：2.4	内外） 呉須；透明釉	白色 緻密	？文		切返文？	高台内蛇あり	手描き	瀬戸・美濃系	江戸時代 後期	
16	16	2a区 SX-39	磁器 中椀	口径：— 底径：(4.0) 器高：1.8	内外）透明釉 外）呉須	灰白 緻密				高台内蛇あり	手描き	肥前系	江戸時代 中期	
16	17	2a区 SX-39	磁器 筒輪花 小皿	口径：(10.0) 底径：(5.3) 器高：2.6	内外） 呉須；透明釉	灰白 緻密	山匠	山水文			手描き 高台虹	肥前系	江戸時代 中～後期	
16	18	2a区 SX-39	磁器 皿	口径：(15.0) 底径：(9.0) 器高：3.5	内外） 呉須；透明釉	灰白 緻密	一重菊襷	菊花文	三方割銀杏？		手描き 蛇の目高台 蛇の目釉ハギ	肥前系	江戸時代 中期	
16	19	2a区 SX-39	磁器 猪口小皿	口径：— 底径：— 器高：2.3	内）コバルト 内外）透明釉	白ガラス質 緻密		紗綾文 葉文	花文		陽刻	瀬戸・美濃系	近代	
16	20	2a区 SX-39	磁器 徳利	口径：— 底径：— 器高：(8.9)	内外）透明釉 外）呉須	灰白 緻密	蛸唐草文				手描き	肥前系	江戸時代 中期	
17	21	2a区 SX-39	陶器 広東形 中椀	口径：(10.7) 底径：5.1 器高：6.3	内外） 呉須；透明釉 白泥	灰白 密	？文		五弁花文		手描き 陶胎染付	瀬戸・美濃系	江戸時代 後期	
17	22	2a区 SX-39	陶器 灯明皿	口径：(9.5) 底径：(3.5) 器高：1.7	内外）裏釉 外）呉須	黄灰 密	体部～底部 無釉（部分的 に裏釉がかか る）					瀬戸・美濃系	江戸時代	煤付着。 底部糸切り。
17	23	2a区 SX-39	陶器 灯明皿	口径：(10.5) 底径：(5.0) 器高：1.7	内外）裏釉； 灰白～にぶい 褐	灰白 密	体部～底部 無釉					瀬戸・美濃系		煤付着。
17	24	2a区 SX-39	陶器 灯明皿	口径：10.6 底径：(4.6) 器高：1.8	内外）裏釉； 灰白～にぶい 橙	灰白 密	体部～底部 無釉					瀬戸・美濃系		煤付着。 底部糸切り。
17	25	2a区 SX-39	陶器 灯明皿	口径：9.5 底径：3.5 器高：3.7	内外）裏釉； にぶい橙	黄褐色～に ぶい橙 密	体部～底部 無釉							煤付着。 底部糸切り。
17	26	2a区 SX-39	陶器 急須	口径：(6.4) 底径：(5.8) 器高：7.0	内外）呉釉 外）白泥；長 石	灰白 密	花文			無釉		瀬戸・美濃系？		
17	27	2a区 SX-39	陶器 土瓶	口径：— 底径：— 器高：(6.5)	内外）透明釉	灰白 密					内面の胴部分 無釉			
17	28	2a区 SX-39	陶器 刷毛目鉢	口径：(11.8) 底径：11.9 器高：7.7	内）灰白 内外）透明釉	灰白 密				無釉	刷毛目	瀬戸・美濃系		

17	29	2a区 SX-39	陶器 鉢	口径：— 底径：(11.2) 器高：(6.5)	外）灰釉	灰白～橙 緻密			無釉				底部離畳あり。
17	30	2a区 SX-39	陶器 壺	口径：— 底径：8.2 器高：[12.4]	内）透明釉 外）灰釉	灰白 密		白胎釉		無釉		瀬戸・美濃系	
17	31	2a区 SX-39	土師 焙烙鍋	口径：(29.0) 底径：(29.0) 器高：4.5	黒色	黒色 密							
17	32	2a区 SX-39	土師 焙烙	口径：(46.4) 底径：(41.0) 器高：5.5	明褐色	明褐色 密							内耳脚か。内面底部に煤。
17	33	2a区 SX-39	瓦	幅：[10.0] 幅：27.0 厚さ：1.8			—	—	—	—	桟瓦		
17	34	2a区 SX-39	土製品 手ずくね 小鉢	長軸：6.5 短軸：5.1 厚さ：2.8	内外）橙			指圧痕あり					

第９表　2a区SX-39出土遺物観察表（2）

（　）は推定値、［　］は残存値

図版番号	NO.	出土場所	種類	法量 (cm)	特徴	推定産地	推定年代	備考
17	35	2a区 SX-39	石製品 砥石	長軸：4.5 短軸：3.0 厚さ：1.8				
17	36	2a区 SX-39	碁石	径：2.3 厚さ：5.5 重量：3.78 g				
17	37	2a区 SX-39	キセル 吸口	径：0.9 長さ：[5.0] 重量：4.79 g				
17	38	2a区 SX-39	キセル 吸口	径：1.3 長さ：[3.8] 重量：6.97 g				
17	39	2a区 SX-39	銭貨 銅銭	径：2.4 孔幅：5.0 厚さ：1.0 重量：1.65 g	寛永通寶			

第10表　2a区出土遺物観察表（1）

（　）は推定値、［　］は残存値

図版番号	NO.	出土場所	種類 器種	法量 (cm)	色調	色 胎土	文様 外面	内面	見込み	底面	特徴	推定産地	推定年代	備考
18	1	2a区	磁器 皿	口径：4.2 底径：9.0 器高：2.7	内外） 呉須：透明釉	白ガラス質 緻密	花文	蔓草文	寿文		手描き	瀬戸・美濃系	江戸時代後期	
18	2	2a区 確認面	磁器 皿	口径：3.4 底径：(9.4) 器高：2.8	内外） 呉須：透明釉	灰白 緻密	魚貝類	大化年制	角足号		手描き	肥前系	江戸時代中期～後期	
18	3	2a区	磁器 皿	口径：— 底径：(9.0) 器高：[1.6]	内外）透明釉 外）呉須	灰白 緻密		雷文			手描き	肥前系	江戸時代中～後期	焼継ぎ痕あり。火をうけている。
18	4	2a区 確認面	磁器 碗	口径：(6.0) 底径：(2.8) 器高：2.8	内外）透明釉 外）呉須	白ガラス質 緻密		二重連弧文 鎧　水草			手描き	瀬戸・美濃系	近代	
18	5	2a区	磁器 小碗	口径：(7.2) 底径：(3.0) 器高：4.6	内外） 呉須：透明釉	灰白 緻密	亀 樂雷文				手描き	肥前系	江戸時代中期	
18	6	2a区	磁器 小碗	口径：(6.9) 底径：(3.0) 器高：4.6	内外）透明釉 外）呉須	灰白 緻密	蔓文？ 二重圏線				手描き	肥前系	江戸時代後期	
18	7	2a区	磁器 小碗	口径：(7.0) 底径：— 器高：[3.6]	内外）透明釉 外）呉須	灰白 緻密	蕨・羊歯？				手描き	肥前系	江戸時代中～後期	

18	8	2a区	磁器 小碗	口径：(7.0) 底径：— 器高：[3.7]	内外）透明釉 外）呉須	灰白 緻密	帯線文				手描き	肥前系	江戸時代 中～後期	
18	9	2a区 機認面	磁器 小碗	口径：(7.0) 底径：(3.0) 器高：5.7	内外） 呉須；透明釉	灰白 緻密	文字文 「□寿万歳長 春□」				手描き	肥前系	江戸時代 後期	
18	10	2a区 機認面	磁器 陽反形 碗	口径：9.0 底径：4.0 器高：4.5	内外） 呉須；透明釉	白色 緻密	蓮芝花文	花文			手描き	瀬戸・美濃系	江戸時代 後期	
18	11	2a区	磁器 碗	口径：(8.5) 底径：(3.4) 器高：4.4	内外） 呉須；透明釉	灰白 緻密	平面文？ 葉文	唐草文	二重圏線 寿文		手描き	肥前系	江戸時代 中～後期	
18	12	2a区 機認面	磁器 陽反形 碗	口径：(9.0) 底径：(4.0) 器高：4.2	内外） 呉須；透明釉	白ガラス質 緻密	葡萄文		文様あり		手描き	瀬戸・美濃系	江戸時代 後期	
18	13	2a区	磁器 碗	口径：(9.8) 底径：— 器高：[4.3]	内外） 呉須；透明釉	灰白 緻密	波文　其文	蔓文			手描き	肥前系	江戸時代 中～後期	貫入あり。
18	14	2a区	磁器 碗	口径：— 底径：(5.0) 器高：[2.0]	内外）透明釉 外）呉須	灰白 緻密	草花文				手描き			
18	15	2a区	磁器 碗	口径：— 底径：3.5 器高：2.5	内）透明釉 外）銅釉・透 明釉・呉須？	灰白 緻密						肥前系		
18	16	2a区 機認面	磁器 陽碗	口径：— 底径：(3.6) 器高：[2.4]	内外） 呉須；透明釉	灰白 緻密	菊花文		文様あり		手描き	肥前系	江戸時代 中期～後期	
18	17	2a区	磁器 丸皿	口径：(13.4) 底径：(8.0) 器高：4.5	内外） 呉須；透明釉	灰白 緻密	唐草文	竹文かご目	五弁花文	雨紀弓	手描き	肥前系？	江戸時代 中期	朱書あり。 銅銹ぎあり。
18	18	2a区	磁器 丸皿	口径：(8.5) 底径：(5.0) 器高：2.3	内外）透明釉 外）呉須	灰白 緻密		五弁花文 唐子花文			手描き	肥前系	江戸時代 中～後期	
18	19	2a区	磁器 角皿	口径：8.0 底径：4.0 器高：2.4	内外）透明釉	白ガラス質 緻密		胡蝶文	梅花花文			瀬戸・美濃系	近代	
18	20	2a区 攪乱	磁器 皿	口径：— 底径：8.8 器高：[2.6]	内外） コバルト；透 明釉	白ガラス質 緻密		蘭蘭唐草文	環状松竹梅文		型紙摺 蛇の目高台	瀬戸・美濃系	近代	
19	21	2a区	陶器 灯明受皿	口径：(11.8) 底径：(5.0) 器高：2.6	内外）呉釉	灰白 緻密	無釉 （口縁部以外）			無釉	回転あり	瀬戸・美濃系	江戸時代	
19	22	2a区	陶器 灯明受皿	口径：(9.0) 底径：(3.2) 器高：1.7	内外）鉄釉	灰白 密	無釉 （口縁部以外）			無釉		瀬戸・美濃系	江戸時代	煤付着。
19	23	2a区	陶器 灯明受皿	口径：(9.0) 底径：— 器高：[1.9]	内外）鉄釉	灰白 緻密	無釉 （口縁部以外）			無釉	回転あり	瀬戸・美濃系	江戸時代	煤付着。
19	24	2a区	陶器 水注 蓋	口径：— 底径：(7.4) 器高：[1.5]	内外） 透明釉；白泥	灰白 密					下部無釉			赤墨書あり。
19	25	2a区	陶器 瓶？	口径：— 底径：(8.6) 器高：[2.5]	外）鉄釉	灰白 密				無釉		瀬戸・美濃系		底部墨書あり。
19	26	2a区	陶器 鉢（片口か）	口径：(14.8) 底径：(6.0) 器高：6.7	内外）鉄釉	灰白 密	体部下部 無釉			無釉		瀬戸・美濃系		無釉の部分に。 煤付着。
19	27	2a区	陶器 鉢	口径：(21.0) 底径：(16.0) 器高：11.4	内外） 透明釉；白泥	浅黄橙 密								植木鉢。
19	28	2a区	陶器 甕 or 鉢	口径：— 底径：20.8 器高：[11.5]	内外）鉄釉	灰白 密						瀬戸・美濃系	近代	底部墨書あり。
19	29	2a区	陶器 徳利	口径：6.0 底径：10.6 器高：23.9	呉釉	浅黄橙 密					底部輪ハボ	瀬戸・美濃系	江戸時代末	

第 11 表　2ａ区出土遺物観察表（2）

（　）は推定値、〔　〕は残存値

図版番号	NO.	出土場所	種類 器種	法量 (cm)	特徴	推定産地	推定年代	備考
19	30	2a 区	石臼	径：— 厚さ：9.5				
19	31	2a 区	鉄製 鋸屑	径：2.3 孔幅：0.7 厚さ：0.1 重量：1.54 g	青木遺跡			

第 12 表　2ｂ区出土遺物観察表

（　）は推定値、〔　〕は残存値

図版番号	NO.	出土場所	種類 器種	法量 (cm)	色調	色 胎土	文様 外面	文様 内面	文様 見込み	文様 底面	特徴	推定産地	推定年代	備考
20	1	2b 区	磁器 端反形碗	口径：(9.4) 底径：(4.0) 器高：5.5	内外）呉須：透明釉	白色 緻密	鳥獣唐草文 蓮弁文	四方樽文	雁区松竹梅文		手描き	瀬戸・美濃系	江戸時代 後期	
20	2	2b 区	磁器 碗	口径：— 底径：4.1 器高：(2.5)	内外）透明釉 外）呉須	灰白 緻密	二重圏線				手描き 松の目軸ハボ	肥前系	江戸時代 中期	
20	3	2b 区	磁器 皿	口径：(13.0) 底径：(7.4) 器高：3.9	内外）呉須：透明釉	灰白 緻密	唐草文	花文 蜻蛉草文			手描き	肥前系	江戸時代 中期	
20	4	2b 区	磁器 碗	口径：— 底径：4.0 器高：[3.1]	内外）コバルト：透明釉	白ガラス質 緻密	鳥獣唐草文 蓮弁文				型紙摺	瀬戸・美濃系	近代	
20	5	2b 区	陶器 徳か	口径：— 底径：(7.2) 器高：[7.3]	外）呉釉	灰色 密				無釉				
20	6	2b 区	陶器 擂鉢	口径：(33.0) 底径：(15.0) 器高：10.8	透明釉	赤褐色 長石 密				無釉				
20	7	2b 区	鉄製品 不明	長軸：[7.2] 短軸：[4.0] 重量：19.2g										
20	8	表土中	磁器 輪花皿	口径：7.8 底径：4.4 器高：1.8	内外）青磁釉			蓮文		無釉	陽刻	肥前系		

第 13 表　4ａ区出土遺物観察表

（　）は推定値、〔　〕は残存値

図版番号	NO.	出土場所	種類 器種	法量 (cm)	色調	色 胎土	文様 外面	文様 内面	文様 見込み	文様 底面	特徴	推定産地	推定年代	備考
25	1	4a 区 SD-46	須恵器 坏	口径：(14.0) 底径：— 器高：[3.7]	内外）灰色	白色粒子 長石					ロクロ成形	益子	9ｃ中頃	
25	2	4a 区 SD-22	須恵器 甕	口径：— 底径：— 器高：[7.5]	内外）灰色	白色粒子 長石	平行叩き	あて具痕 ナデ消し				益子	9ｃ後半か。	
25	3	4a 区 SD-22	須恵器 甕	口径：— 底径：— 器高：[3.7]	内外）灰色	白色粒子 長石	平行叩き	あて具痕 ナデ消し				益子	9ｃ後半か。	
25	4	4a 区 SD-22	須恵器 甕	口径：— 底径：— 器高：[4.1]	内外）灰色	白色粒子 長石	平行叩き	あて具痕 ナデ消し				益子	9ｃ後半か。	

第 14 表　4ｂ区出土遺物観察表

（　）は推定値、〔　〕は残存値

図版番号	NO.	出土場所	種類 器種	法量 (cm)	色調	色 胎土	文様 外面	文様 内面	文様 見込み	文様 底面	特徴	推定産地	推定年代	備考
27	1	4b 区	土師器 坏	口径：(17.0) 底径：(8.0) 器高：5.5	内）黒色 外）黒～明褐色	白色粒子		ヘラミガキ			内黒 ロクロ成形		9ｃ後半	
27	2	4b 区	須恵器 甕	口径：— 底径：— 器高：[3.7]	内）灰色 外）黒色	長石	平行叩き	あて具痕 ナデ消し			外面自然釉	益子	9ｃ後半	

第４章　調査の成果

平成 26 年度国道４号の電線共同溝事業に伴う本遺跡の調査では、近世の日光道中雀宮宿に関わる遺構・遺物を検出・出土している。この県道の拡幅工事に伴う調査でも、同様の遺構・遺物を確認している。他にも、ＪＲ雀宮駅の周辺、東側の調査地区で、古代に属すると思われる遺構及び古代の遺物を発見している。これらについて若干所見を述べることとしたい。

第１節　古代から中世

ＪＲ雀宮駅の周辺の調査区（３・４区）では、調査区を東西に横切るＳＤ－22 を検出しており、９世紀後半の須恵器の甕が出土している。その頃には機能していたと考えられる。またＳＤ－22 は、固く締まった面があり、一回埋もれた溝を掘り直し、再び使用したと推測される。

また、４ａ区では、南北に延びるＳＤ－46 は、ＳＤ－22 に切られていることから、ＳＤ－46 はＳＤ－22 よりも古い遺構である。それが証拠にＳＤ－46 から９世紀中頃の須恵器の坏の破片が、ＳＤ－22 からは９世紀後半の須恵器の甕の破片が出土している。他にも４ｂ区から、９世紀後半の土師器の坏が出土しているので、ＪＲ雀宮駅の西側には、平安時代初頭の遺跡が広がっている可能性が高い。

３ａ区ではＳＤ－22 と重なる南北溝の南端（ＳＤ－21）を検出している。この溝は、土層の観察により、ＳＤ－22 よりも新しいことがわかっている。つまり、３・４区では、少なくとも３時期の遺構があることがわかる。ただしＳＤ－21 から遺物が出土していないため、時期を特定できていないが、９世紀後半以後の遺構であることは間違いない。

また、調査区域の西側の１ｄ・ｅ・ｆ区でも、ローム層を掘り抜いている東西溝（ＳＤ－５・８・13）を確認している。これらの遺構からは遺物が出土していないため、いつの時代に機能していた遺構かは明らかでない。『宿村大概帳』の控えと思われる天保 15 年（弘化元年、1845）の「日光道中　雀宮宿」[1] という帳面には、「宿内田ハ畑多く、東田用水者上横田村地内田川ハ引取、流末者羽牛田村・茂原村之小川江落候、西谷田者用水無御座、天水場ニ御座候」とある。意味は、宿内では田よりも畑が多く、東田の用水は、上横田村内の田川から引き、羽牛田村・茂原村の小川へ流している。西谷田は、用水は使わず、雨水を使用しているといったものである。つまり、東田には田川からの用水路があったことがわかるが、宿内へは用水路を引いていないようである。さらに、同じ史料に「宿内呑水者堀井を用候」とあり、雀宮宿では飲料水を井戸からの水を使っていることがわかる。また、宿は南北に道が通っており、標高についてみると、北が高く、水は北から南に流れることから、これらの遺構が宿内の排水路などにかかわっているとは考えにくい。また、宿にかかわるものであれば、陶磁器が出土してもおかしくない。よって、これらの溝は江戸時代の宿場にかかわる遺構ではなく、江戸時代より古いものであると考えられる。この調査区からは近世・近代以降の遺物以外は出土していないことから、ＳＤ－22・46 のように古代に属する遺構の可能性も捨てきれない。

天保 14 年ごろ成立の『日光道中略記』によると、「当宿ハ下横田村よりの分村にて、本郷より土地高きを以て、台横田村と号し、東のかた奥州古道の辺より人民住せしか」[2] とあることから、ＪＲ雀宮駅や国道４号がある雀宮宿跡がある台地には、奥州古道あったと言い伝えられていることがわかる。奥州古道は南北の道路と考えられるが、今回の調査では、中世に属する道の痕跡や道に関わる２列に並んだの側溝のような南北溝を確認することができなかった。今後の調査に期待したい。

ただし、中世末に比定される遺物が１ａ区のＳＫ－１・３から出土している（第７図２・４）。さらに、

国道４号の電線共同溝事業に伴う調査で、ＥＲ－12 で古瀬戸と思われる陶器や 17 世紀のすり鉢が出土している。今回の調査の１ａ区と国道４号の調査のＥＲ－12 は近接している。つまり、雀宮宿の成立以前や成立時期の遺物が１区西側で出土しているので、この周辺に中世末から近世初頭に人が住んでいたと思われる。このことと先に挙げた「日光道中略記」の記載と併せて考えると、中世の奥州古道と近世の日光街道はそれほど違っていない場所を通っている可能性もある。

第２節　近世以降

（１）県道拡幅工事に伴う調査について

１区・２区では、主に近世から近代にかけての日光道中雀宮宿に関わる遺構・遺物を確認している。

江戸時代後期の天保 15 年の雀宮宿は家数が 72 軒、その内に本陣、脇本陣、旅籠 38 軒とされる[3]。つまり、半分近くの家は、宿屋を経営するのではなく、飲食店を経営する人、職人、農業が家業であったことが、雀宮宿の特徴である[4]。

栃木県立文書館に雀宮宿の名主を勤めた芦谷家の文書が寄贈されている。天保 14 年の第 13 代将軍徳川家慶の日光社参の際に、幕府は下準備として日光道中等の各宿の家数などを調査した。芦谷家にはそのとき幕府に提出したと考えられる雀宮宿についての文書の写しが数多く残されている。文書群中に、天保 13 年に作成された「雀宮宿家並絵図」[5] がある。これには、当時の雀宮宿の家の配置・建坪と家主が書かれている。今回調査した１区・２区の地点を絵図に落とすと、第 28 図のようになる。

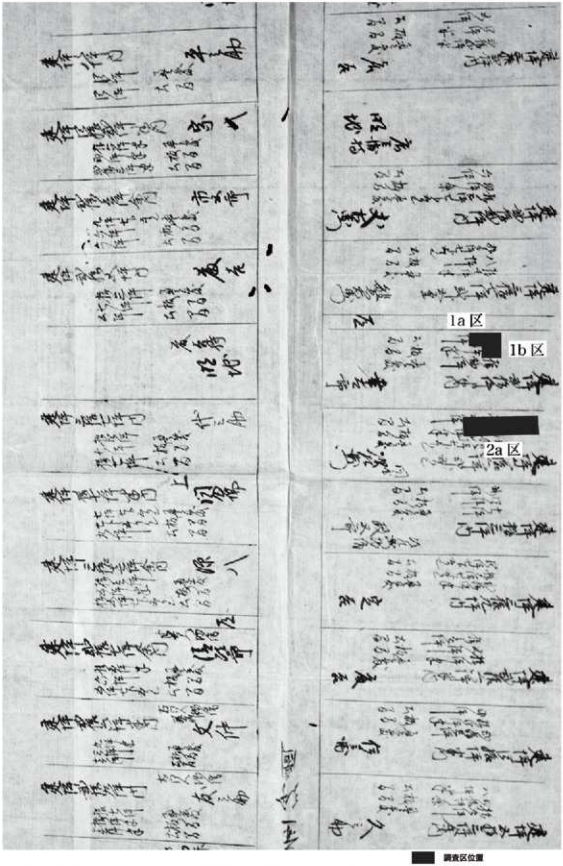
そうすると、１区は幸太郎の家の敷地にあたる。幸太郎の持高は不明であるが、建坪はこの絵図から判明する。建坪は全体で 20 坪半あり、12 坪が畳敷き、７坪半が板間、１坪が土間である。雀宮宿は文字通り宿駅であるので、当然伝馬役を果たさなければならない。ちなみに日光道中の宿駅は伝馬用の馬 25 匹準備しなければならなかった（実際は 20 匹）。また、当時、人と馬は同じ屋根の下で一緒に暮らしており、馬は土間で飼われていた。つまり、幸太郎の家では、土間が１坪しかないので、馬を飼うほどのスペースは無く、伝馬役が掛けられる家ではなかったことが伺われる。絵図には 76 軒の家が記載されており、20 坪ぐらいの家は雀宮宿では平均よりやや下である（第 15 表）。

遺物は、特にＳＸ－12 から大変多く出土しており、近世の陶磁器が大半を占める。また、１ｄ区から出土している遺物は、ＳＸ－12 に関わるような遺物であろう。その中でも、磁器は肥前系が多く、陶器は瀬戸・美濃系が多い。文久２年（1862）の「宿内全住居人別帳」[6] には、幸太郎についての記載はなく、幸太郎は下人を使うような店を経営しているようではなさそうである。だが、この地点から多くの食器に使うような陶磁器が出土していることと、ＳＸ－12 のような蔵に伴うと考えられる地下室を持っていることから、幸太郎は、それほど大きくはないが宿屋を経営していたと考えられる。

２区は、先の絵図をみると、次左衛門宅にあたる（第28図）。次左衛門は、名主と問屋を兼帯している。また、本陣や脇本陣では事が足りない時には、仮本陣として本陣の役割をすることもあった（天保 14 年及び慶応元年の将軍日光社参時）。次左衛門は持高 45 石１升４合７勺５才[7]、家の建坪は 66 坪２分５厘で、28 坪７分５厘が畳敷き、22 坪半が板間、15 坪が土間であった。宿内では、次左衛門は持高についてみれば、本陣で年寄役を兼ねる半左衛門（79 石７斗３升６合４勺）に次いで２番目であり、もう一人の問屋（脇本陣）の平次右衛門（33

第15表　雀宮宿坪数毎家数表（天保13年）

坪数	軒数
１坪以上～ 10 坪未満	３ 軒
10 坪　〃～ 20 坪　〃	18 軒
20 坪　〃～ 30 坪　〃	26 軒
30 坪　〃～ 40 坪　〃	15 軒
40 坪　〃～ 50 坪　〃	７ 軒
50 坪以上	７ 軒
合計	76 軒



第 28 図　雀宮宿家並絵図 (調査区位置を入れたもの)（栃木県立文書館所蔵芦谷孚家文書を加工）

石９斗９升９合７勺）よりも多く、宿内でも有力な家であったことは確実である。また、建坪では本陣の半右衛門 115 坪半、脇本陣の平次右衛門 94 坪、組頭の五郎右衛門 84 坪半、宇兵衛の 79 坪７分５厘に次いで５番目の家である。また、天保 13 年成立の「宿役人名前並帳附・人馬指名前帳」では、次左衛門の名前が最初に書かれていることから、宿内で最有力の人物の一人であると考えられる。この文書によると、次左衛門は、名主役を勤めると同時に、旅籠も経営していた。[8]

２ａ区のＳＸ－39 からは大変多くの陶磁器等が出土している。２区の遺構外の遺物も次左衛門の持ち物であったと考えられる。ここも１区（幸太郎宅）と同様、磁器は肥前系が多く、陶器は瀬戸・美濃系が次ぐ。また、１区に比べると２区は掘った面積が狭いわりに、２区の方が遺物の量が多い。２区の遺物はほとんどがＳＸ－39 に伴うものとしても、ＳＸ－12（遺構確認面から約 65 ㎝）よりＳＸ－39（遺構確認面から約 115 ㎝）の方が圧倒的に深く掘られており、ＳＸ－39 は規模の大きい地下室であったと推察される。これは、次左衛門と幸太郎の格の高さを反映しているものと思われる。ただし、出土遺物の量は違うが質はほぼ同じである。

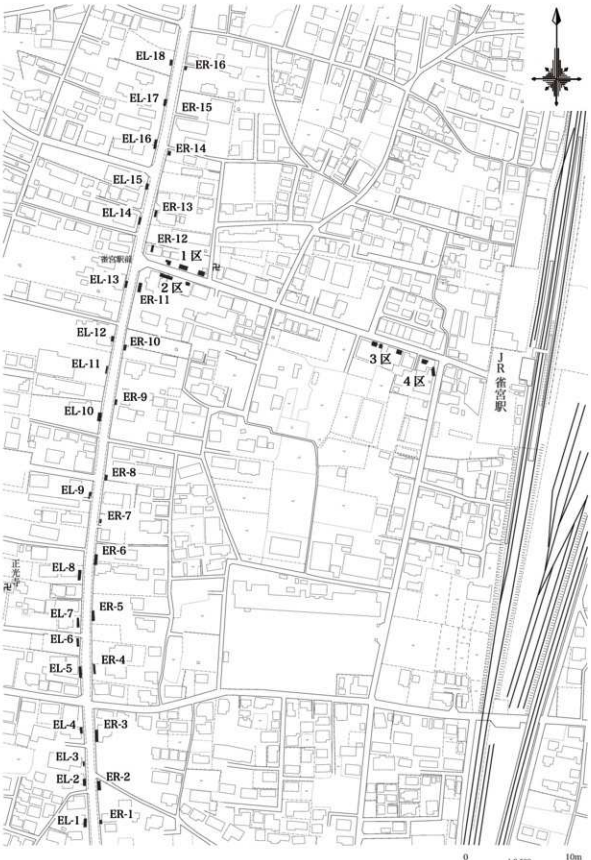
遺物をみると、主に江戸時代中頃から明治時代までの陶磁器が多く出土している。江戸時代中期に属する遺物は、肥前系の磁器が多くを占め、江戸時代後期から明治期に入ると、瀬戸・美濃系の磁器が進出する。そして、コバルト染付がみられるようになるといった傾向がある。

（２）平成 26 年度調査について

雀宮宿跡は、県道の拡幅工事に伴う発掘調査を実施する直前に国道４号の電線共同溝事業に伴う発掘調査が行われている。本項では国道の調査と今回の調査の結果を併せて考察を述べる。また、推定ではあるが、平成 26 年度調査した調査区と、先ほど挙げた天保 13 年の「雀宮宿家並絵図」（第 32 図に示した）の家並を現在残されている地割りに当てはめてみると、第 30 図のようになる。その地割りに家主の名前を入れたのが第 31 図になる。

そうすると、国道の調査区について、天保 13 年の家主を推定すると次のようになる（第 16 表）。宇都宮方面に向かって国道西側の調査区南から、ＥＬ－１の家主は元吉で、建坪は 14 坪である。ＥＬ－２は家主瀧蔵で、建坪 22 坪である。ＥＬ－３は畑にあたる。ＥＬ－４は家主庄助で、建坪 15 坪である。ＥＬ－５は家主常八で、建坪 10 坪である。ＥＬ－６の家主は平次の後家のたかで、建坪 11 坪である。ＥＬ－７は家主又兵衛で、建坪 33 坪半である。ＥＬ－８の家主は重松で建坪 27 坪半である。ＥＬ－９の家主は脇本陣で問屋を勤める平次右衛門で、建坪は 94 坪である。平次右衛門は脇本陣の他に、質屋と粕・干鰯を商っている[9]。ＥＬ－10 の家主は弥吉で、建坪 27 坪半である。ＥＬ－11・12 の家主は本陣で名主を勤める半右衛門で、建坪は 115 坪半である。ＥＬ－13 の家主は清次郎で、建坪は 27 坪余である。この地は、本陣を勤める半右衛門の土地で、清次郎は彼からこの地を借りている。ＥＬ－14 の家主は藤吉で、建坪は 25 坪である。ＥＬ－15 の家主は宗八で、建坪は 42 坪半である。ＥＬ－16 は本山派修験の寺院常覚院の所有地で、天保 13 年には空き地であった。ＥＬ－17 の家主は市右衛門で、建坪は 35 坪である。ＥＬ－18 の家主は長八で、建坪 22 坪である。

国道東側の調査区南からＥＲ－１は絵図では家主は書かれていない場所にあたると思われる。ＥＲ－２は天保 13 年段階では畑である。ＥＲ－３の家主は枡蔵・市助・按摩の専弥の３人で、建坪は 19 坪である。この地は脇本陣を勤める平次右衛門の土地で、彼らは平次右衛門から当地を借りていた。ＥＲ－４は、天保 13 年段階では本陣を勤める半右衛門持ちの空き地である。ＥＲ－５の家主は平三郎で、建坪 36 坪半である。ＥＲ－６は脇本陣を勤める平次右衛門所持の空き地である。ＥＲ－７は下問屋場で、建坪は 15 坪である。



第29図　H26年度雀宮宿跡調査区位置図

第 16 表　調査区家主対照表

○国道調査分

調査区名	家主	建坪	遺構の有無	遺物の出土	備考
EL-1	元吉	14 坪	○	×	
EL-2	龍蔵	22 坪	○	×	
EL-3	畑		○	×	
EL-4	庄助	15 坪	○	○	
EL-5	常八	10 坪	○	○	
EL-6	平次後家たか	11 坪	○	○	
EL-7	又兵衛	33 坪半	○	○	
EL-8	重松	27 坪半	○	×	
EL-9	平次右衛門	94 坪	○	○	脇本陣・問屋役
EL-10	弥吉	27 坪半	×	×	
EL-11	半右衛門	115 坪半	○	○	本陣・名主
EL-12	半右衛門	115 坪半	○	○	本陣・名主
EL-13	清次郎	27 坪余	○	○	半右衛門所持
EL-14	勝吉	25 坪	○	○	
EL-15	宗八	42 坪	○	○	
EL-16	空き地		○	○	常覚院所持
EL-17	市右衛門	35 坪	○	○	
EL-18	長八	22 坪	○	×	
ER-1			×	×	
ER-2	畑		○	×	
ER-3	桝蔵・市助・専弥	19 坪	○	×	平次右衛門所持
ER-4	空き地		○	×	半右衛門所持
ER-5	平三郎	36 坪半	○	×	
ER-6	空き地		×	×	平次右衛門所持
ER-7	下問屋場	15 坪	○	○	
ER-8	伝兵衛	40 坪	○	○	組頭・旅籠経営
ER-9	伊兵衛	40 坪半	○	○	
ER-10	定吉	39 坪	×	×	
ER-11	次左衛門	66 坪２分５厘	×	×	名主・問屋役（仮本陣）
ER-12	幸太郎	20 坪半	○	○	
ER-13	丈右衛門	22 坪	○	×	
ER-14	空き地		○	×	金乗院所持
ER-15	岩蔵	33 坪半	○	×	
ER-16	紋右衛門	16 坪	○	×	

○県道調査分

調査区名	家主	建坪	遺構の有無	遺物の出土	備考
１区	次左衛門	66 坪２分５厘	○	○	名主・問屋役（仮本陣）
２区	幸太郎	20 坪半	○	○	

ＥＲ－８の家主は組頭を勤める伝兵衛で、建坪は 40 坪である。ＥＲ－９の家主は伊兵衛で、建坪 40 坪半である。ＥＲ－10 の家主は定吉で、建坪は 39 坪である。ＥＲ－11 の家主は、先述している問屋及び名主を勤める次左衛門で、建坪は 66 坪２分５厘である。ＥＲ－12 の家主は、これも先述した幸太郎で、建坪は 20 坪半である。ＥＲ－13 の家主は丈右衛門で、建坪は 22 坪である。ＥＲ－14 は金乗院持ちの空き地である。ＥＲ－15 の家主は岩蔵で、建坪 33 坪半である。ＥＲ－16 の家主は紋右衛門で、建坪は 16 坪である。

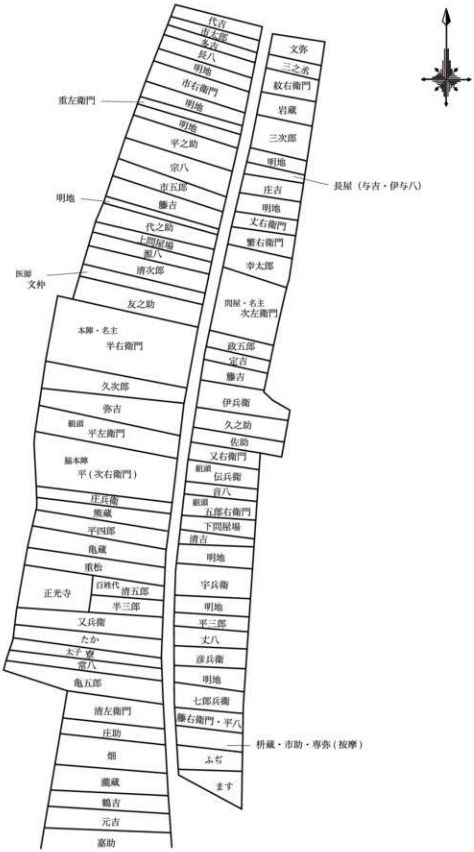
上記の調査区で遺構が確認できていないのは、ＥＲ－１・６・10・11 で、ＥＬ－10 は、大きくカクランを受けており、遺構・遺物は確認されなかった。また、ＥＲ－１は、宿場の境目にあたると考えられ、建物はなかったと考えられる。

ＥＲ－６については、脇本陣を勤める平次右衛門が所持している空き地である。もしかすると、当調査区から、遺構・遺物が無かったので、江戸時代には長い間建物が建てられなかったのかもしれない。

ＥＲ－10 の家主は定吉で、建坪は 39 坪である。雀宮宿において、建坪については広い方に属する。遺構・遺物が無かったということは、空閑地を調査した可能性がある。

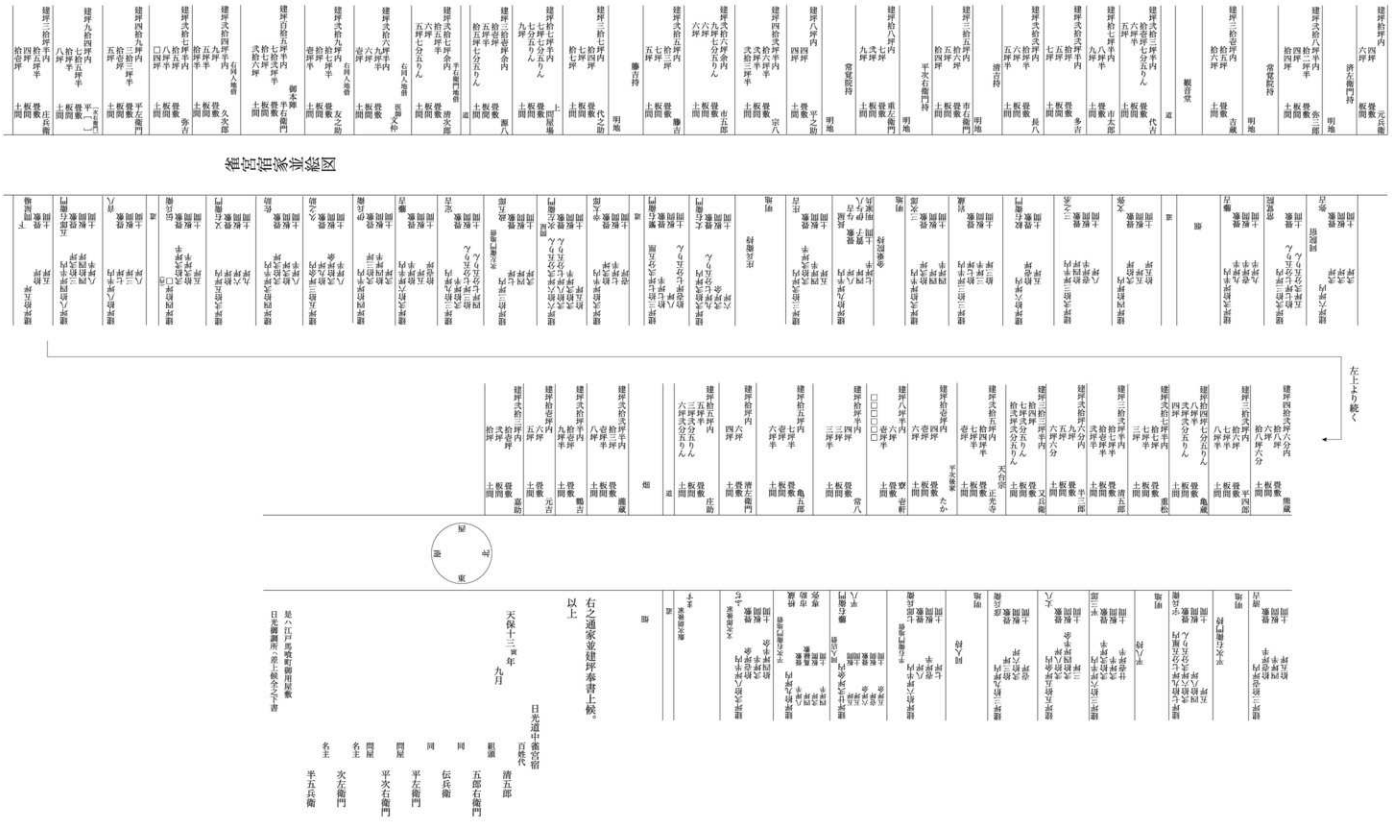
EL-18
ER-16
EL-17
ER-15
ER-14
EL-16
EL-15
ER-13
EL-14
ER-12
1区
2区
EL-13
ER-11
仮本陣
本陣
EL-12
ER-10
EL-11
ER-9
EL-10
脇本陣
ER-8
EL-9
ER-7
ER-6
EL-8
正光寺
EL-7
ER-5
EL-6
EL-5
ER-4
EL-4
ER-3
EL-3
EL-2
ER-2
ER-1
EL-1
H26年度調査区位置
0
1:3,500
10m

第 30 図　雀宮宿宿割図



【天保 13 年「雀宮宿家並絵図」（芦谷孚家文書）をもとに作成】

第 31 図　雀宮宿宿割図（名前入）



第32図　雀宮宿家並絵図　[天保13年「雀宮宿家並絵図（芦谷孚家文書, 文書番号 201-28)」]

ＥＲ－11 については、国道４号に伴う発掘調査報告書において、次左衛門の庭先であるため遺構・遺物が確認できなかったという。[10]

ところで、国道分の調査は、調査面積の割には出土遺物が少ないという特徴がある。そこで、遺物が発見されている調査区をあげると、ＥＬ－４・５・６・７・９・11・12・13・14・15・16・17、ＥＲ－７・８・９・12 である。遺物は国道の西側の調査区の方が、出土遺物が多いことがわかる。このうち特に遺物が多く出土している調査区は、ＥＬ－７・９・11、ＥＲ－８である。

ＥＬ－７の家主は又兵衛で建坪も 33 坪半と、当宿内では比較的大きな規模を誇る。出土遺物は、陶磁器が多く、17 ～ 19 世紀の物で占められている。また、建坪は、土間が 12 坪あり、畳敷きが 14 坪あることから、旅籠もしくは飲食店等を営んでいたと推察される。そのため、陶磁器が多く出土したのだろう。

ＥＬ－９は脇本陣の平次右衛門宅の敷地にあたる。ここでも、多くの陶磁器が出土している。国道分の調査では、最も出土遺物の量が多い地点である。また、平次右衛門宅は建坪が 94 坪あり、本陣の半右衛門宅の建坪 115 坪に次いで宿内２番目の大きさである。また、持高は、33 石９斗９升９合７勺であり、名主・問屋を勤める次左衛門、本陣の半右衛門に次ぐものと思われ、宿内の有力な家であることは間違いない。また、先にも述べたように彼は問屋役も勤め、質屋で粕や干鰯を商いしていた。[11] また、脇本陣でもあるので、人の宿泊にも対応できるようになっていたと考えられる。そのため、多くの陶磁器が出土したのであろう。

ＥＬ－11 は、本陣の半右衛門で持高は 79 石７斗３升６合４勺である。建坪は宿内トップで、持高は次左衛門に次いで２番目である。ＥＬ－11 では礎石が出土している。ＥＬ－12 も本陣にあたる地点を調査している。ＥＬ－12 の遺構の性格については不明である。また、国道分の調査の特徴は旧日光道中に面する地点を掘っていることである。このこととＥＬ－11 が本陣の敷地であることから、ＥＬ－11 は半右衛門の敷地の南側に位置するので、これらの礎石は門の礎石である可能性がある。また、大岡実氏の間取図によると、２つ門があり、宇都宮方面に表門、江戸方面に通用門が書かれている。[12] よって、ＥＬ－11 の礎石は通用門にかかわるものと推測される。

ＥＲ－８の家主は、伝兵衛の敷地であると考えられる。伝兵衛は組頭を勤めている。[13] 建坪が 40 坪で、持高は６石１斗７升３合５勺で、旅籠を経営している。[14] ＥＲ－８も出土遺物は陶磁器が主である。これも伝兵衛が旅籠を経営していたからと思われる。

このようにみてくると、陶磁器が多く出土している場所は、旅籠等を経営するような家の敷地から出土していることがわかる。国道分の調査は、当時の日光道中に面する地点であるため、遺物の出土はそれほど多くはならないことが想定される。その中でも陶磁器が出土するということは、出土した家で多くの陶磁器が使われていたことを示すものであろう。

註

（１）栃木県立文書館所蔵芦谷孚家文書、文書番号 201-29。『宇都宮市史』第五巻　近世史料編Ⅱ（1981）48 頁。ここでは、『市史』を原史料で校訂した。

（２）今井金吾監修『道中記集成』第 16 巻（大空社、1996）37 頁。

（３）註１文書。『宇都宮市史』第五巻、39 頁。

（４）註１文書。『宇都宮市史』第五巻、39 頁

（５）栃木県立文書館所蔵芦谷孚家文書、文書番号 201-28。

（６）栃木県立文書館所蔵芦谷孚家文書。『宇都宮市史』第五巻 50～58 頁。

（７）栃木県立文書館所蔵芦谷学家文書、文書番号 201-11。「宿役人名前並帳附・人馬指名前帳」（『宇都宮市史』第五巻 59～62 頁）。以下の各人の持高はこの文書から引用している。

（８）この家は、「検地帳」や「年貢割付」などの村政に関わる文書を所持していたことからもわかる。

（９）註７文書。『宇都宮市史』第五巻 59 頁。

（10）栃木県教育委員会・（公財）とちぎ未来づくり財団編『雀宮宿跡－国土交通省関東地方整備局による宇都宮雀宮地区国道４号電線共同溝事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－』(2015)

（11）註７文書。『宇都宮市史』第五巻 59 頁。

（12）手塚良徳「日光街道雀宮宿－江戸後期の雀宮宿を中心に－」（『栃木県立博物館紀要』第２号、1985）に掲載されている図による。

（13）註７文書。『宇都宮市史』第五巻 60 頁。

（14）註７文書。『宇都宮市史』第五巻 60 頁。

〈参考文献〉

愛知県史編さん委員会編 2007 『愛知県史』別編　中世・近世　瀬戸系　窯業２

今井金吾監修 1996『道中記集成』第 14 ～ 16 巻（大空社）

宇都宮市史編さん委員会編 1976 『宇都宮市史』第一巻　原始・古代編

宇都宮市史編さん委員会編 1981 『宇都宮市史』第五巻　近世史料編Ⅱ

九州近世陶磁学会編 2000 『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会 10 周年記念－』

古泉弘 1990 『江戸の穴』（柏書房）

児玉幸多監修 1987 『日光道中分間延絵図』第四巻（東京美術）

齋藤慎一 2010 『中世東国の道と城館』（東京大学出版会）

杉山博・下山治久編 1995 『戦国遺文』後北条氏編　第五巻（東京堂出版）

手塚良徳 1985 「日光街道雀宮宿－江戸後期の雀宮宿を中心に－」（『栃木県立博物館紀要』第２号）

栃木県教育委員会編 2008 『栃木県歴史の道調査報告書　第１集　日光道中　日光道中壬生通り　関宿通り多功道』

栃木県教育委員会・（公財）とちぎ未来づくり財団編 2015 『雀宮宿跡－国土交通省関東地方整備局による宇都宮雀宮地区国道４号電線共同溝事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－』

栃木県教育委員会・(財) 栃木県文化振興事業団編 1986 『越名西遺跡・越名河岸跡－一般県道佐野古河線「越名工区」道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－』

栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団編 2005 『祇園城跡関連遺跡－地方道路交付金事業一般県道小山結城線（（都）小山結城線外１路線小山市本郷町）に伴う発掘調査－』

栃木県史編さん委員会編 1974 『栃木県史』史料編　近世１

栃木県史編さん委員会編 1976 『栃木県史』資料編　考古１

栃木県立文書館編 2010 『戦国期下野の地域権力』（岩田書院）

本多隆成 2014 『近世の東海道』（清文堂）

丸山雍成 1992 「街道・宿駅・旅の制度と実態」（丸山雍成編『日本の近世６　情報と交通』中央公論社）

第５章　まとめ

雀宮宿跡の調査では、大きく古代、中世末～近世初頭、近世、そして近代にかけての遺構、遺物が出土している。遺跡の主体となる近世・江戸時代は、日光道中 16 番目の宿場としての雀宮宿跡の一部が確認され、詳細については第４章までの報告で述べてきたとおりである。ここでは、各時代の成果について、改めて概要を記してまとめに代える。

古代は調査区の東側、ＪＲ雀宮駅寄りで、南北方向と東西方向の溝が確認されている。出土した須恵器は９世紀前半と後半に位置づけられるものであり、遺構外出土ではあるが内面黒色処理の土師器もみられることから、周辺に平安時代の集落の存在が推定される。主に ＪＲ雀宮駅の西側を中心として集落が展開していた可能性がある。

中世は、瀬戸・美濃系の陶磁器（小皿・おろし小皿）がわずかながら出土している。遺構からの出土であるが、伴うかどうかは不明である。中世末に比定されるもので、国道４号の調査でも、本調査区の近くでその時期の遺物が認められており、雀宮宿成立以前の人々の痕跡を窺うことができる。なお、同じ遺構から鉄製のヤスが出土している。２本の棒を折り曲げて一方の内側に配し、４本歯としている。時期は不明である。

近世は、国道 ４ 号に近くの調査区（１・２区）で数多くの土坑や遺物が発見されている。遺物は、磁器が最も多く出土している。とくに近世中期から末にかけての肥前系の磁器が多く、近世末からは明治にかけては、瀬戸・美濃の磁器もみえるようになる。陶器になると瀬戸・美濃産も多い。

今回の調査は、日光道中に対し直交した方向に調査区を設定しているため、１ 区は１軒の敷地にあたり、２区は別の家の敷地にあたると考えられる。１区から出土した近世～近代の遺物は、天保末年でいうと幸太郎宅に関わる遺物ということができる。同様に２区は次左衛門宅のものといえる。

注目されるのは、地下室と考えられる遺構を２基検出していることである。1 区で検出した遺構(SX-12)は、幸太郎宅（天保年間）のものと考えられ、遺構確認面から約 60 ㎝と比較的浅いものであった。２区で検出した地下室（SX-39）は、遺構確認面から約 115 ㎝で、１区のものと比較すると圧倒的に深いものであった。これは、名主と問屋を兼帯する次左衛門宅（天保年間）の蔵の跡と考えられる。規模の違いは、宿や家の持ち高や格などに比例するものと思われる。

特に地下室からの遺物の出土量は豊富である。遺物、遺構ともに雀宮宿に住んでいた人の痕跡とみることができる。

今回の雀宮宿跡の調査は道路拡幅に伴うものであり、加えて常時往来が激しい主要道路であることなどから、きわめて限定された調査であった。しかし、芦谷家文書群中の絵図によって、当時の宿割と調査区を照合させる作業ができたことは、基礎的ではあるが、歴史をより立体的に捉えることができる材料を提供する重要な成果として意義のあることと考える。今後の雀宮宿跡解明の一助になれば幸いである。

写　真　図　版

雀宮宿跡遠景（北から）

雀宮宿跡全景（南西から）

図版二　遺構一

1a 区　全景（北西から）

1a 区　SK-1 完掘（西から）

1a 区　SK-1・3 完掘（南西から）

1a 区　SK-3 土層堆積状況（南から）

1c 区　全景（南東から）

1c 区　SK-6 完掘（北東から）

1d 区　全景（北西から）

1d 区　SX-12 完掘（西から）

1d 区　SD-8,SK-9 完掘（西から）

1d 区　SX-12 土層堆積状況（北から）

1d 区　SX-12 遺物出土状況（東から）

1e 区　全景（東から）

1e 区　SD-5 完掘（西から）

1e 区　SD-5 土層堆積状況（東から）

1f 区　全景（西から）

1f 区　SD-13,SK-14･15･18 完掘（北から）

図版四　遺構三

1f 区　SD-13,SK-16･17 完掘（北から）

1f 区　SD-13,SK-19･20 完掘（南から）

1f 区　SD-13,SK-19 土層堆積状況（東から）

2a 区　全景（南東から）

2a 区　SX-39 西壁検出状況（南から）

3a区　SD-21･22,SK-23･25～28 完掘（東から）

3a 区　SD-21 土層堆積状況（南から）

3d 区　全景（北西から）

3c 区　全景（東から）

3c 区　SD-22 完掘（東から）

3d 区　全景（東から）

3e 区　SD-22,SK-30 完掘（北西から）

3e 区　SK-31 完掘（西から）

3e 区　SD-22 土層堆積状況（西から）

4a 区　全景（北から）

4a 区　SD-22 完掘（東から）

図版六　遺構五

4a 区　SK-40･41･42 完掘（北から）

4a 区　SK-43 完掘（北西から）

4a 区　SK-44 完掘（西から）

4a 区　SD-46・SK-47･48 完掘（北から）

4a 区　SX-49 完掘（北から）

4b 区　全景（北から）

4b 区　SK-50 完掘（東から）

4b 区　SK-50 土層堆積状況（西から）

図版七　遺物一（陶磁器）

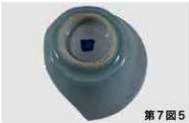
第7図1

第7図2

第7図5

第7図4

第7図2


第7図5

第7図6

第8図1

第8図1

第10図1

第10図2

第10図3

第10図4

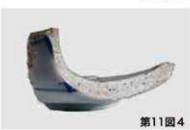
第10図5

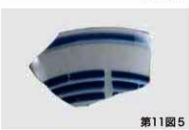
第11図2

第11図1

第11図1

第11図3

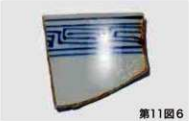

第11図4

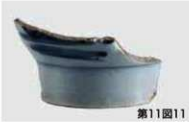

第11図5

第11図7

図版八　遺物二（陶磁器）

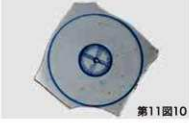
第11図6


第11図6

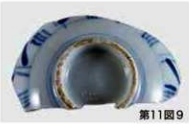

第11図11

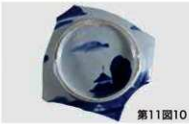
第11図8

第11図9

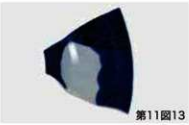

第11図10

第11図8

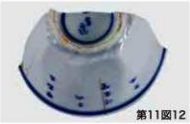

第11図9


第11図10

第11図12


第11図13

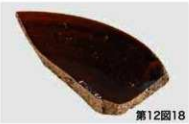
第11図14


第11図12

第11図15

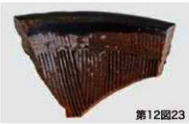
第11図16

第12図17


第12図18

第12図20

第12図19

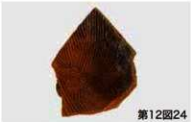

第12図23

第12図20

図版九　遺物三（陶磁器）

第12図21

第12図22


第12図24

第12図21

第12図22

第12図24

第12図25

第12図26

第12図27

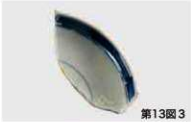
第13図1

第13図2

第13図3

第13図1

第13図2


第13図3

第13図4

第13図5

第13図7

第13図4

第13図5

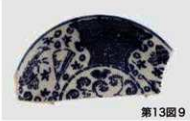
第13図7

第13図6

第13図6

第13図8

第13図6

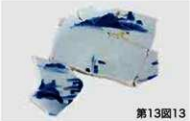

第13図9

第13図11

第13図10

第13図10

第13図12


第13図13

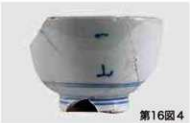
第13図14

第13図15

第16図1

第16図2

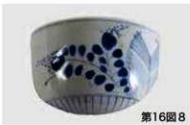
第16図3

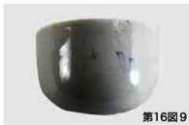

第16図4

第16図5

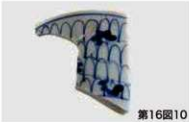
第16図6

第16図7


第16図8


第16図9

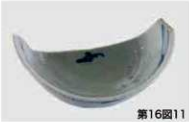
図版十一　遺物五（陶磁器）


第16図10

第16図11

第16図13

第16図12


第16図11

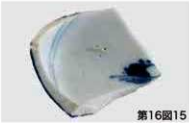
第16図13

第16図14

第16図15

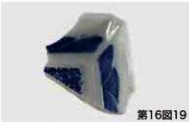
第16図16

第16図14


第16図15

第16図17

第16図18


第16図19

第16図20

第17図21

第17図22

第17図23

第17図24

第17図25

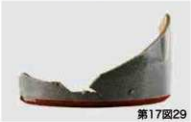
第17図27

図版十二　遺物六（陶磁器・内耳土器・瓦）

第17図26

第17図26

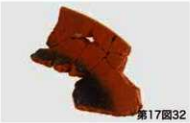
第17図28


第17図29

第17図30

第17図31

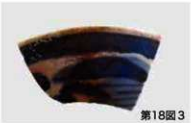
第17図29

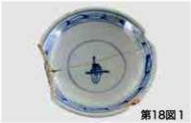

第17図32

第17図33

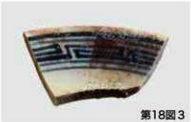
第18図1

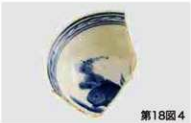
第18図2


第18図3


第18図1

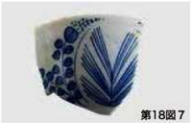
第18図2

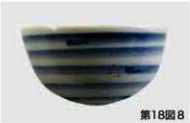

第18図3


第18図4

第18図5

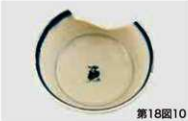
第18図6


第18図7


第18図8

第18図9

図版十三　遺物七（陶磁器）


第18図10

第18図11

第18図12

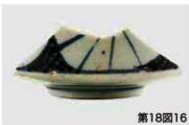
第18図10

第18図11

第18図15

第18図13

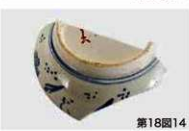
第18図13


第18図16

第18図14

第18図17

第18図18


第18図14

第18図19

第18図20

第19図21

第19図22

第19図23

第19図26

第19図27

第19図29

図版十四　遺物八（陶磁器・土師器・須恵器・土製品）

第19図24

第19図25

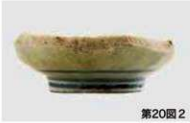
第19図28

第19図24

第19図25

第19図28

第20図1


第20図2

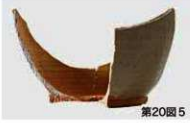
第20図3

第20図1

第20図2

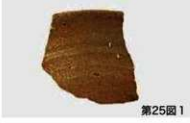
第20図3

第20図4


第20図5

第20図6

第20図8


第25図1

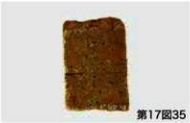
第25図2・3・4

第27図1

第27図2

第17図34

図版十五　遺物九（石製品・キセル・銭貨・鉄製品）・古文書


第17図35

第17図35

第17図36

第19図30

第17図 39・40

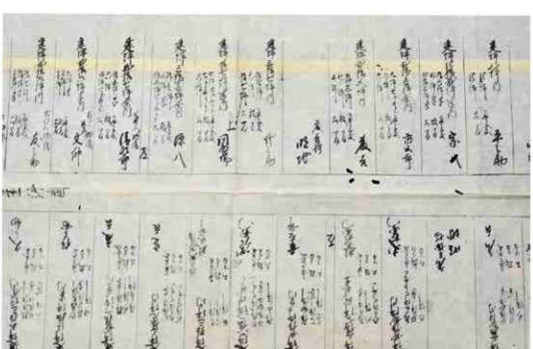
第19図31

第17図 37・38

第7図3

宿役人名前並帳附人馬指名前帳（表紙）

宿役人名前並帳附人馬指名前帳（次左右衛門分）


雀宮宿家並絵図（部分）

※古文書の写真３点は栃木県立文書館所蔵

報告書抄録

ふりがな	すずめのみやしゅくあと
書名	雀宮宿跡
副書名	街路造づくり事業費（補助）3・4・109号雀宮駅前線（一般県道雀宮停車場線）に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	栃木県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第381集
編著者名	藤田典夫　大木丈夫
編集機関	公益財団法人とちぎ未来づくり財団　埋蔵文化財センター
所在地	〒329－0418　栃木県下野市紫474番地　TEL 0285－44－8441
発行機関	栃木県教育委員会　公益財団法人とちぎ未来づくり財団
発行年月日	西暦2016年3月29日（平成28年3月29日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
すずめのみやしゅくあと 雀宮宿跡	うつのみやし 宇都宮市 すずめのみや 雀宮			36°29′30″	139°52′20″	20141001～ 20141130	213㎡	県道改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
雀宮宿跡	宿場跡	古代 近世 近代	土坑　44基 竪穴　2基 地下室　2基 溝跡　6条 不明遺構1基	土師器・須恵器 陶磁器・土器・銅製品・銅銭・砥石	

要約	田川と姿川に挟まれた宝木台地に位置し、国道4号付近では、近世から近代にかけての日光道中雀宮宿に関連する土坑・地下室などを検出し、遺物は18世紀から19世紀の陶磁器が大量に出土した。特にSX－39は江戸時代雀宮宿の名主・問屋役を務めていた次左右衛門宅の地下室の跡と考えられ、そこから多くの近世～近代の陶磁器が出土した。さらにJR雀宮駅西側では東西約13m以上あると推定される溝跡SD－22も確認している。そこからは9世紀代の須恵器が出土している。4a区ではSD－22に壊されている9世紀代の溝を検出している。JR雀宮駅周辺には古代の遺跡が広がっているものと考えられる。

栃木県埋蔵文化財調査報告第381集

雀 宮 宿 跡

―街路造づくり事業費（補助）3・4・109号雀宮駅前線（一般県道雀宮停車場線）
に伴う埋蔵文化財発掘調査―

発行　栃 木 県 教 育 委 員 会

宇都宮市塙田１－１－20

ＴＥＬ　028（623）3425

公益財団法人とちぎ未来づくり財団

宇都宮市本町１－８

ＴＥＬ　028（643）1011

平成28年３月29日発行

編集　公益財団法人とちぎ未来づくり財団

埋蔵文化財センター

下野市薬474番地

ＴＥＬ　0285（44）8441

印刷　下野印刷株式会社

本書は栃木県教育委員会の承認を得て、
（公財）とちぎ未来づくり財団が発行す
るものである。